
あそころはクーパーがいた

村上まゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あのころはクーパーがいた

【Nコード】

N2247F

【作者名】

村上まゆみ

【あらすじ】

瑞穂、小学三年、美月、小学一年。やさしい父と心配性の母に包まれて育った釧路の日々。脱走してきた賢い土佐犬・クーパーを軸に繰り広げられる少年時代を、瑞穂は回想する。今の自分が求めているものを思い出すために。

第1章

僕は昔から「可哀想」という言葉が大嫌いだ。何故かといえば口先だけで「可哀想」と連発する奴に限って何もしないのが多いからだ。

小学生の時の卒業文集で、嫌いな言葉の欄に僕は「可哀想」と書いた。そして好きな言葉の欄には「自由意思」と。

僕は今も昔も、人から可哀想がられるのも、誰かのことを「可哀想」と口にだして言うのも嫌いだ。哀れみや同情なんて欲しくない。それくらいならいっそ、カッターナイフで心臓を抉られて死んだほうがましだと僕は断言しよう……。

中学一年の時の自分の日記を読み返し、僕は思わず苦笑した。確かこの頃は受験勉強で忙しく、とにかくなんでもいいから捌け口が欲しいと切望していた頃だった。べつに日記にこんなことが書いてあるからといって、僕は誰かにいじめられていたわけでもなければ、誰かに殺意を抱いていたというわけでもなかった。ただ受験勉強の合間合間にそのようなことを空想していたという、それだけのことだった。

たとえば それはつまりこういうことだ。

今僕は飢餓に見舞われているというわけでもなく、物質的にとても豊かで高水準な生活を送ることができているけれど、もしたった今、明日にも飢え死にしたらどうするか　僕は多分、他人の食糧を盗む機会があったとしたら、少しも迷うことなくためらうことなく、それを盗むと思う。そして腹いっぱいになったあとで、良心が痛むようなこともまったくないだろう。

また、たった今自分が死ぬか殺されるかという状況に陥ったとしたら　そして自分の手に武器となるようなものが握られていたとしたら　目の前にいる人間を殺すのに、迷いやためらいが果たし

て必要だろうか？

いや、断じてそのようなものは必要でないはずだ。間違いなく僕は刃を抜いて、眼前の敵を倒すだろう。それはあまりにも当然なことだ。

もちろん大人になった今の僕は、そう簡単に割り切って決断を下せるものではないと、十分に理解しているつもりだ。でも中学生の時の僕の思考回路はそんな感じだった。

つまり、学校の退屈極まりないお経のような授業中に、僕は死ぬだの殺すだのという状況を自分に設定しては、常に生きのびるための最善の道を迷うことなく選びとっていたということになる。

シャープのカチカチという音は時限爆弾の音で、定規はロケットの発射台。そして消しゴムが手榴弾やロケットとして空想世界に発射されることになる。

ヒュー、ドガン！

「大尉、敵陣爆破しました」

「うむ。全軍突撃！前へ進め！」

大尉の怒号が飛ぶ。僕は一兵卒だが、この戦争による勲功によって二階級特進することがすでに決定済みだった。ただし、このまま生きて無事祖国へ帰ればの話だが……。

「じゃあ次の問題は甲斐に解いてもらおう。甲斐瑞穂！黒板の前にてきなさい」

「はい、先生」

僕はしぶしぶ黒板の前へでて、白いチョークを握る。三角比の証明。この問題のパターンはすでに先週塾で叩きこまれたばかりだ。

「流石だな、甲斐。将来は数学の学者にでもなるつもりか」

「ええ、まあ」

こんなものを証明できたからって、一体なんだというのだろう。

もし勝浦先生　通称カツツ　が僕が本当になりたいものを知ったとしたら、彼の鬘は十メートルくらい後ろにすっ飛んでいたに違いない。

そしてそれから四年後、僕は漫画家になりたいという自分の夢を叶えることができていた。

僕の中学の三年間と高校の三年間は、明るくもなく暗くもなく、至極普通だった。偏差値の高いエスケーター式の私立で、まわりには比較のお嬢さんお坊っちゃんが多くくいじめ>というようなことは、よほどのことでもなければ起きなかった。ただそのかわり八メを外すような生徒もほとんどなく 当然内申点に関わるためだ

僕にはその六年、激しく勉強したというような記憶しかない。そもそも僕が何故勉強ができたかといえば、それは教育ママゴンである母親を抜きにしては語れない。僕は四歳の頃から英会話の塾にやらされ、七歳の時からは公文式に通わされていた。僕の妹の美月はピアノにバレエだ。でも僕も妹も、母さんのことを一度も恨んだりしたようなことはないし、ある意味ではそうした境遇を与えてくれたことを感謝してもいる（妹もおそらくそうだと思う）。ただ僕はあの六年、青春の光も影も味わうことなく灰色だったことを、今も後悔しているという、それだけなのだ。

僕の家庭は決して、人並み外れて裕福というわけではなかった。親父の職業は新聞記者で、中の上の生活くらいは家族にさせてやれるというような収入だったと思う。それにも関わらず母さんは少し背伸びをし、子供を塾に通わせたり習いごとさせたり、私立の学校へ入れたりするための努力を家計簿と睨みあいつつしていたというわけだ。

僕は先ほど自分の中学と高校の六年間が灰色だったと言ったが、自分の精神状態を<灰色>と認定するには、他の精神的な着色料について知っている必要があるのは言うまでもないだろう。ここからは、僕が小学生だった頃の話を少し長くしたいと思う。僕にとって、素晴らしく輝いて思えた子供時代の記憶のことを……。

僕は小学二年の三学期という極めて中途半端な時期に、札幌から釧路へと引越すことになった。理由は父の転勤によるものだ。二年ほど地方に出向したのち本社へ戻って出世　いわゆる栄転というものだったらしい。でも当時子供だった僕には、そんなことはどうでもよかつたし関係なかつた。とにかく仲のいい友達と離れたくないと、そうとしか思えなかつた。べつに父さん、このまま平の新聞記者だつていいじゃないかつて、そんなふうに思つてた。

しかしそんな息子の胸中を知つてか知らずか、母さんは極めて上機嫌だつた。それというのも、中古とはいえ一軒家に住むことができる予定だつたからだ、釧路では。いや、正確には一軒家の半分、半軒家といつたところだつたらうか。

釧路の鳥取、という場所にあるその家は、昔はラーメン屋さんだつたらしい。ところがラーメン屋の主人は女を作つて蒸発してしまい、残された奥さんは自分ひとりで店を切り盛りするのが難しくなつて手放したということだつた。

そしてこの青い屋根に白い壁の二階建て一軒家は、実に構造が奇妙だつた。つまり、以前ラーメン屋をやつていた部分と、自宅にしていた部分が完全に別れていて、二世帯住宅のような形になっているのだ。昔ラーメン屋だつた部分を今は、黒い顔をしたC型肝炎の男が借りて住んでおり、僕たち家族が　残りの半住居を一月三万七千円で借りるということになつたわけだ。

僕と妹と母さんは、その庭と物置のついた中古の家を見るなり、目を輝かせた。母さんは団地の人づきあいからやつと解放されたことを喜び、僕と妹はその家の妙ちきりんな構造に狂喜した。

「隣に住んでるおっさんはちよつと頭おかしそうだけど、関わりあいにいなければいいだけだもんね」

「そんなふうになつたよ。案外、話してみたら面白い人かもしれないだろ」

「まあたそーやつて優等生ぶる。隣のおっさんは絶対イカしてるつて。あの鳥が巣を作つてるみたいなのサボサの頭、お兄ちゃんだつ

て見たでしょ？」

「うん……まあな」

ふたつ年の離れた妹に、口で勝った試しのない僕は、美月と共同で使うことになった部屋を見渡した。ほんの十畳ほどの部屋ではあるが、以前は七・五畳の部屋をふたりで分けあっていたことを思えば、ずっと広くなったように感じる。もちろん、それはまだ荷物が運びこまれていないせいでもあったけど。

僕は今でも、八歳から十歳まで過ごしたこの家の二階からの景色を、よく思いだすことがある。あれから一体、何度この家のことを夢に見たことだろう。夢の内容はいつも他愛のないことが多かった。机に向かって勉強していると、下からカレーの匂いがしてきて「今日の晩ごはんはカレーか」と思っている夢や、美月が「えっち！のぞかないでよ！」とピンク色のカーテンをシャツと閉めたところで覚める夢とか。そうだ。僕はこの部屋の中央を仕切るカーテンの色のことで、引越してきた日そうそう、妹と大喧嘩した。

そもそも僕は狭い部屋をカーテンで仕切るといふ妹の案からして気に入らなかった。何故なら十畳という畳敷きの部屋が、ことさら狭くなったように感じられるだろうからだ。

「もしピンクのカーテンで仕切ってくれないなら、下の部屋をひとつ美月にちょうだい。下には居間と寝室の他に、もうひとつ部屋があるんだからいいでしょ」

「そうねえ……」

荷ほどきをしていた母さんが、隣のずんぐりむっくりした亭主にちらと視線を送る。ようするに「あなた、なんとかしてちょうだい」ってことだ。

「ウォッホン」父さんは埃っぽい部屋を掃除しながら、咳をひとつした。「そうだなあ、美月。下の部屋をひとつやってもいいが、居間と寝室の間の部屋だぞ。茶の間にお客さんがきてる時は丸見えになるし、何かとバタバタしてせわしないぞ、きつと」

「べつにいいもん、それでも」

妹はおもちゃの人形の服をねだる時と同じ要領で、それからもねばり続けたが、引越しの作業で何かと忙しい両親にいくらつきまともしても無駄だった。最後には母さんに「今忙しいんだから、あとにしてちょうだい」と邪険にされて終わった。

「部屋が片付け終わったあとじゃ遅いじゃないのよ」

むくれながら階段を上ってきた美月は、隣の家とを隔てる壁を何度も足で蹴っている。

「大体隣のおっさんには二階なんて必要ないじゃない。どうせわびしい独りもんなんだから。二階にもうひとつ部屋さえあれば、お兄ちゃんと一緒じゃなくてもいいのに……」

まだ子供だった僕は、妹のその言葉を聞いてムツとした。

「言っとくけど美月、カーテンの色は絶対ブルーか緑だからな。ピンクなんてカーテン、僕は絶対絶対死んでも嫌だ」

美月は茶色の壁からくるりと振り向くと、今度はわあわあ泣きだしている。

「やだもん。カーテンは絶対ピンクなんだもん。そう決まってるんだもん」

妹が泣こうがわめこうが、僕は容赦する気はなかった。大体美月はいつもずるいのだ。達者な口を利くくせに、最後は泣いて自分の一番欲しいものをとろうとするのだから。

「カーテンがあるうとなかるうと」僕は泣きじゃくる妹に宣戦布告するように言った。「この線からおまえは入ってくるな。一ミリでもはみだしたら、げんこつ食らわせてやるからな。それが嫌なら罰金百円だ」

心持ち、少しばかり僕が多く領土をとると、妹はそのラインとなっているダンボールのひとつをぐいぐい押し寄こした。

「ずるい、そんなの。あとでお父さんに言いつけてやるから」

「うるさい、ガンコ。僕のほうが兄貴なんだから、おまえの部屋のほうが狭くても、それは当然なんだ」

僕とガンコ 『パーマン』の妹のガンコに、彼女は性格がそっ

くりなのだ　はお互いにダンボールをぐいぐい押しつけあい、最後にはその中身を取りだして互いに投げつけあった。そして上の騒ぎに気づいた母さんが、僕たちを怒鳴るために二階へ上ってくるまでそれは続いた。

美月に甘い父さんといえば、石黒ホームまでカーテンのりールを買いにいっており　当時は社名がまだホームマックではなく、石黒ホームだった　二階の天井を巻尺できっちり測った中央に、それをとりつけた。カーテンの色は結局のところピンクだ。でも僕はもうそれ以上何も文句を言う気はなかった。

引越そうそう喧嘩をすると、家族に悪いことが起きるといふ母さん言葉を信じたからではなく　結局のところ、僕は本当はカーテンなんかどうでもよかったのだ。ピンク色っていうのは確かに少し嫌だったけど、根本的なことはそういうことじゃない。僕は妹が自分のことを邪魔者みたいに扱ったのが許せなかっただけなのだ。

僕たち家族が釧路へ引越してきた、大晦日まであと一週間というその日の夕食は、とても豪華だった。お寿司にケンタッキーにケーキ、それにシャンメリー……ダンボールのいくつかをテーブルのかわりにして御馳走を並べ、TVのまだない部屋で家族の団欒を心ゆくまで楽しんだ。そして夜は茶の間に四人で川の字になって眠った。

これは僕が大人になってから思い至ることだけど、父さんと母さんは多分、何があるうと絶対に美月に部屋を与えることはなかったと思う。何故なら彼らは、子供ふたりを二階へ追いやっておいて、夜は夫婦のセックスライフを満喫する予定のようだったからだ。

確かこれも、釧路へ越してきて間もない頃のことだったと思う。母さんと僕と美月が三人でTVを囲んでいると、美月がおもむろにこう聞いた。

「ねえお母さん、せつくすってなあに？」

ちなみにTVではドリフターズの『8時だよ！全員集合』をやっている。べつにいやらしいような漫才を志村けんや加藤茶が繰り広げているわけでもなかった。

「三浦くんがね、最近よく美月や隣のミカちゃんにこういうの。『おまえら、せつくすが何が知ってるか？』って」

「ミウラって、斜め向かいのひまわりマンションに住んでる奴だろ。せつくすかあ。お兄ちゃんもなんか、聞いたことはあるような気がするんだけどな……」

セックスが何かまったく知らないこの時の僕は、妹の疑問に答えようと一生懸命だった。

せつくす、せつくす、せつくす、せつくす……。

「ああ、そうだ！」僕はぼんと手のひらを叩いた。「確かせつくすっていうのは男が格好つけることを言うんだよ」

「ええー？そうかなあ。美月はなんか違うような気がするけど。ミウラくんの口ぶりだと、なんかちよつといやらしいことのような……」

「大丈夫だよ。僕が言うんだから間違いないって。明日ミウラに会ったらこう言ってやれよ。せつくすっていうのは、おまえみたいに変に格好つけてる奴のことをいうんだって」

「うん。じゃあそうする」

ソファーから転げ落ちんばかりにして笑っている母さんを振り返り、僕と美月はふたり同時に首を傾げた。母さんは一生懸命笑いをこらえながら、声もたえだえに、

「……父さんが、帰ってきたら……聞いてごらんなさい」と言った。そして実にタイムリーなことに、ちょうど父さんがその時帰ってきたのだ。美月は玄関に父さんを迎えにでると、早速とばかり疑問を投げかけた。

「ねえお父さん、せつくすってなあに？」

父さんはソファーの上で笑い死にしそうになっている妻を見て、大体のところ事情を察したのだらう、書類鞆を置いてネクタイを緩

めると、美月の肩に両手をおいてこう言った。

「美月ちゃん。セックスっていうのはな、男の人と女の人が愛しあうことをいうんだよ」

「ふうん……」

まだよくわからないといった雰囲気娘に、父さんは噛んで含めるように言い聞かせる。

「瑞穂が生まれたのも美月が生まれたのも、父さんと母さんが愛しあったからだ。おまえたちは父さんと母さんの愛の結晶ともいうべき存在なんだよ」

「愛の結晶……」と美月が口の中で繰り返す。「でもお父さん、なんかそれってダサくない？」

父さんは立ち上がりながら、苦笑している。

「そうかもしれないね。でも本当の愛っていうのは、実は結構ダサイものなんだよ」

笑い死に寸前から立ち直った母さんは、父さんの答えに満足したのだろう、夕ごはんのカレーを温めたり、冷蔵庫からビールをだしたりするために、のれんをくぐってキッチンへ向かった。

僕はといえば、セックスという言葉の意味を間違えたことが恥かしくもあつたけど、何故か父さんの答えに、妙に納得してもいたのだった。

第2章

ところで、僕は学校で友達が全然できなかった。それは当時の僕にとって「甲斐瑞穂、人生最大の危機」とも思えるような出来ごとで、小学三年という幼い僕の知能では、自分に何故友達ができないのかがさっぱりわからなかった。もちろん、大人になった今ではそれがどうしてだったのかが少しだけわかるような気もする。それはつまりこういうことだった。セックスという言葉の意味を妹に説明しようとした時もそうだったけど、僕は人と喋る時や何かに答えを返そうとする時、なるべく完璧に近い形で話そうとする癖があった（セックスの時は間違っただけど、僕は人からされた質問に対してなるべく真剣に答えを返そうするタイプだった）。

でもそれは他の子供たちにとっては、どうも奇妙な違和感を感じることのようだった。

うまく説明するのが難しいけど、たとえば僕と母さんと美月が三人で『クイズダービー』を見ていたとしようか。あるいは『クイズヒントでピント』でも『クイズタイムショック』でもなんでもいい。母さんや美月は答えが間違っただけとあってようと、わりとすぐにパツと答えを口にだすタイプだ。でも父さんと僕は違う。これでもず間違いなだらうという解答についてしか、口にはださない。

つまり、クラスのみんなが僕について感じていたのはそういうことだった。

『確かにコイツ、勉強はできるかもしれないけど、なんかとっつきにくい』

それでも、小学二年の三学期の時はまだよかった。季節外れの転校生ということで珍しがられ、みんなにちやほやされもした。だが三年になってクラス替えが行われるなり、クラスに顔馴染みがひとりもいなくなった。いや、本当はひとりだけいることにはいるのだ。彼の名前は井家太郎。みんなからはフケツの代名詞として嫌わ

れている。本当のことをいうと僕は彼と仲良くしたくないわけではなかったのだが、そうすることによって仲間外れの仲間入りをしたくないような、奇妙なジレンマがあったのだ。

井家くんがフケツの代名詞として嫌われている理由をいくつか上げてみよう。

1・そばに近づくと、なんとなくクサイ（どうやら風呂には一週間入らないこともざららしい）。

2・家が貧乏。

3・授業中に鼻をほじる。

……などなど。一度など、彼の耳の中からうじ虫がでてきて隣の女子の机にちょこんとのったことさえあるという。以来、彼は女子から圧倒的に嫌われ、席替えが行われるたびごとに、彼の隣になった女子は悲鳴を上げた。中にはさめざめと泣きだす女子さえいる。そしてみんなが輪になってこう慰める　「可哀想な○○ちゃん。でも大丈夫よ、机をくっつけさえしなければバイキンは移らないから……」

うちのクラス　三年二組　では、実に「エツタチンキバリア」という呪文が流行った。その呪文は女子たちを井家くんのバイキンから守ってくれるものらしい。また何かの間違いで井家くん及び井家くんの持ち物に触れてしまったとしても　その呪文を唱えれば清められるらしい。

また男子たちの中には、そのような女子の態度を軽蔑する者も幾人かはいるのだが、何分女子たちがうるさすぎるのだ。もし仮に井家くんと肩を組んで歩こうものなら　次の日には「エツタチンキバリア」の標的にされるといわけだ。

ところで、そのように神経質な女子たちに対する井家くんの反応はというと、実にクールなものだった。時々鼻をほじる余裕さえ見せていたのだから……というのは、冗談とはいえ少し言いすぎかも

しれない。彼も心の中では本当は深く傷ついていたのだから。

ところで、このような時、三年二組の学級担任は何をしていたのだろう？彼　戸塚湊先生（三十四歳、独身。通称ヨットスクール）は、何もしなかった。ちなみに彼がヨットスクールと一部の生徒から仇名されているのは何も、彼がスパルタ式に子供たちを鍛えていたからではない。たまたま名字が某スパルタスクールの学校名と一緒だったためだ。

戸塚先生は確かに、女子たちにたびたび注意を与えはした。「井家くんをいじめてはいけない」、「井家くんを笑ってはいけない」、
「井家くんをフケツ呼びわりしてはいけない」……でも結局のところそれは口先だけで、なんら根本的な解決を与えるものではなかった。いや、ヨットスクールはそれでも一度だけ、かなり先生らしいところを見せたことはあった。一学期の夏休みに入る二週間ばかり前のことだったろうか。井家くんの頭があまりにフケだらけで、爪の中も真っ黒なのを見るに見かねて　クラスの男子何人かと一緒に銭湯へ行くことにしたのだ。

その時先生及び井家くんと一緒に鶴の湯へいったのは、松平や平野、斉藤に宇佐美、笠原といった連中だった。特に松平と平野は以前から女子の井家くんに対するとり扱いに反対しており、また学級委員の宇佐美などは鼻につく優等生らしさで、しょっちゅう井家くんのことをかばっていた。

「みんな、やめろよ！井家くんが可哀想じゃないか」
でも僕はクラス内で0.1ミリほど浮きながらも　まるでドレーモンの足のよう　宇佐美のその科白を聞くたびに、不愉快なものを感じていた。

（おまえ、本当に井家くんのことを可哀想だなんて思ってるのか。ただ単に自分の優等生的気分を満足させたいだけなんじゃないのか）
って、そんなふうにしか思えなかったんだ。

しかし結局のところ、僕も宇佐美と同罪だったに違いない。僕は

クラスの中心メンバーのひとりである松平に「甲斐も一緒にこないか」と誘われた時、その誘いを断ってしまったからだ。

本当のことをいえば、僕もみんなと一緒に行きたかった。でも何故よりもよって銭湯なんだ、というのが僕の本音だった。これももし昆虫採集や釣りをしにくってというような話なら、僕は喜んで井家くんと一緒にみんなと出かけただろうに。

僕は今も昔も、銭湯という場所が苦手なのだ。いわゆる、海パンをはいて露天風呂に入りたがるタイプというのだろうか（実際にそんなことをしたのは一度もないけど）。

だから、もし松平に誘われたのが銭湯じゃなかったらどんなに良かっただろうと、僕は家に帰ってから悲しみに暮れた。きっと松平はこう思っただろう。『とっつきにくい上に、つきあいまで悪い奴』って。もう二度と誰も、僕のことなんかどこにも誘ってくれないに違いない……そう思うと、夏休みも間近だというのに、僕の気分は暗い沼の底にまで落ちこんでいった。

ところで、井家くんは先生や松平たちと銭湯へいった翌日、ござっぱりとしてフケツのフの字も見当らないような状態だった。しかしそれにも関わらず、女子たちの彼に対する冷たい仕打ちは相変わらずだった。

それというのも、一緒に銭湯へ行った女子のスパイみたいな笠原が、次の日みんなにこう言っただけだからだ。

「井家、すげえ汚いぜ。俺もまさかここまでとは思わなかったもんなあ。あいつが風呂に入った途端、ブクブク垢が浮き上がってきてさ、間違いないかあれは一か月以上は風呂に入ってたんじゃないか」と見たね」
教室の隅で井家くんがその話を聞いていても、笠原はまったく構わないような様子で、女子たちの前で堂々と話し続けた。垢こすりで垢をこすったところ、これでもかというくらい垢がでてきたこと、戸塚先生が風呂上がり「もう参った」と真つ赤な顔で洩らしたこと、鶴の湯の番頭さんに垢だらけの湯槽について叱られたことなど

……。

「やだあ、キタナイ」

「銭湯も商売上がったりだよな、それじゃあ」

「本人はスツキリしたかもしれないけどさ、まわりにそれだけ迷惑かけるんじゃないか……」

くすくす、ひそひそ。

聞こえよがしの当てこすりに、僕はいつも以上に腹が立った。それで、小綺麗になった井家くんにか何か話しかけようと思って席を立つたけど、その必要はなかった。

「やめるよ、おまえら！とにかく井家は風呂に入って清潔になったんだ。これでもう誰にも馬鹿になんかせないからな！」

松平は平野と一緒に井家くんの机を囲むと、隣の女子の机とぴつたりくつつけた。

「やだ、やめてよ！あんたたち勝手に……」

水野沙夜香が悲鳴を上げると同時、みながみな、エッタチンキバリアの姿勢に入る。水野はじわりと泣きだすと、しゃくり上げながら教室を出ていった。

「松平！あんたなんてことするのよ。沙夜香ちゃんが可哀想だとは思わないの！？」

クラス一気の強い女子、渡辺真奈が松平と平野に詰め寄る。

「へっ。なーにが可哀想だよ。じゃあ井家は可哀想じゃないとでも言うのかよ、おまえら」

「それは……」

渡辺が言葉に詰まっていると、本鈴が鳴り、戸塚先生が泣きじゃくる水野と一緒に教室へ入ってきた。

「なんだ、おまえら。朝っぱらからまた喧嘩か」

先生はやれやれというように溜息を着くと、水野に席へ戻るように言った。水野は着席と同時に、井家くんから机を十センチほど離している。

「いいかげん、先生を困らせないでくれよ。井家はきのう銭湯へい

つてつるつるのピカピカになった。これで問題はすべて解決済みだ。もう二度と井家にフケツとかなんとか言わないこと。わかつたな？」
みんながしぶしぶ「はい」と気の抜けたような返事をする、先生は出席をとりはじめた。

廊下側の一番後ろの席に座る僕は、窓際の席に座る井家くんのことをちらと眺め　こう思った。彼はいつも何も言わないけれど、実際のところ、本当はクラスのみんなや先生のことをどう感じているのだろうか。

そしてこれは夏休みまであと三日となったある放課後に起きた事件だ　僕は何気に物凄い光景を目撃してしまった。いつも通学途中でみかける犬のクーパーが、じゃらじゃらと二メートルほど鎖を下げて、道を闊歩しているではないか。

放課後、僕は家へと帰る道すがら、いつものようにぼんやり考えごとをしていた。なんとか一学期が終わるまでに友達を作りたいと思っていたけど、このままいくと二学期も三学期も友達がいないまままで終わるんじゃないかって、そんな気がして。

そして大きな土佐犬のクーパーは、暗い顔つきをしたそんな小学生の脇を堂々と歩いていったのである。

噛まれたらどうしようかと反射的に身構えたけど、クーパーは僕にちらと視線をくれただけで、フンと鼻を鳴らして歩み去っていった。
(……うわー、びっくりした)

同じ形の建売住宅が何軒も並ぶ通りを、ゆっさゆっさと体を揺らしながら、クーパーはのんびり歩いていく。

(でもどうしたんだろう。加藤さん、このこと知ってるのかな……)
土佐犬のクーパーは、僕と同じ町内に住む、加藤さんが飼っている犬だ。僕は毎朝、加藤さんちを通りかかるたびにこう思っていた

この獰猛そうな犬がもし後ろ足で立ち上がったとしたら、僕と同じくらいの身長がありそうだな、と。そしていつもこわごわ忍び足で通りすぎるようにしていた。

(あつ！クーパー……！)

なんと、僕がクーパーの後ろ姿を見送っていると、向こうから三輪車に乗ったガキンチョがやってくるではないか。

(逃げる！逃げるんだ！あいつには三輪車なんかじゃまず勝ち目はない……)

ところが命知らずの四歳くらいのガキンチョは、嬉しそうな顔をしてクーパーに近づいてくる。

(駄目だ。もうおしまいだ……)

思いきって電信柱の影から飛びだすと、僕は四歳くらいのガキを三輪車ごと避難させることにした。

「危ないから、気をつけて遊ぶんだよ」

ガキンチョは命の恩人に礼を言うこともなく、黙ってキコキコ三輪車を漕いでいく。

(ふー、やれやれ)

額の汗を拭くと、僕はクーパーの後ろを引き続き追跡することにした。多分このままいくと誰かが保健所に電話をかけるに違いないが、それまでどんな被害もでないと、一体誰に保証することができらるろう？

僕はクーパーを見かけたこと及び、またクーパーが自分の見知っている犬であるということに対して、何か責任めいたものを感じた。一番いいのは飼い主の加藤さんに知らせることだが、でももし僕が目を離れた際に、住民に被害がでたとしたら……。

ごくり、と生唾を飲みこむと、僕は重いランドセルを背負った体で、クーパーの後ろ姿を引き続き追いかけることにした。

クーパーが一体どこに向かおうとしているのか、僕にはさっぱりわからなかった。彼が行こうとしているのは、自分の小屋のある家とはまったく正反対の方向　学校のある方角だった。

(もしクーパーが校庭やグラウンドに迷いこんだとしたら、小学生たちの間で大騒ぎになるだろうな。そして知らせを受けた先生が保

健所に電話をして、クーパーは……)

僕はふるふると首を振った。その前に、なんとか無事加藤さんの家までクーパーを連れ帰らなければならぬ。

(ああっ！)

今度は公園の脇を、上品そうな日本猫がやってきた。僕も時々見かける野良で、みんなから「たま」と呼ばれている猫だ。

このままいくと二匹は数メートルで接触することになる。(逃げる！逃げるんだ、たま！君のすばしっこさをもってすれば、クーパーが追いかけてきても逃げ切れるだろう……)

そして僕が一生懸命「しっ、しっ！」と電信柱の影から手でサインを送っていると、ぼん、と肩に手をおく者の影があった。「おまえ、一体なにやってんの？」

松平はチューインガムをふくらませながら、僕にも一枚、それを差しだした。

「……ありがとう。そうだ！たま！」

前方を振り返ると、そこには互いにガンを飛ばしあう、犬と猫の姿があった。先に目を逸らしたのはたまのほうで、彼女はまるで何ごともなかったというように、ゆうゆうと道路を横断していく。

「うわー、すげえでけえ犬。あんなのに噛まれたら、人間の子供なんかイチコロだな」

「そう思うだろ？」僕もガムを噛みながら言った。「でもあの犬、うちの近所の犬なんだ。たぶん何かの拍子に棒杭がすっぽ抜けてさ、それで……」

「あつ本当だ。あの鎖、ニメートルはあるんじゃないか？なんかさー、とうとうやったかって感じもするよな。きつとあの犬、鎖に縛られてる生活が嫌になったんだよ」

「そうかなあ」

松平と僕は肩を並べて歩きながら、自然とクーパーの後を追う形になった。

「加藤さんて、年金暮らしのおじいちゃんでさ、すごく優しいいい

人なんだ。僕や美月に　美月って妹なんだけど　時々、美味しいお菓子や庭に咲いてる綺麗な花をくれたりするんだよ。クーパーのことも物凄く可愛がってたし……」

「ふうん。でもさ、優しさと押しつけがましさってのはまた別ものだろ。犬にしてみりゃあ自由に散歩にいけないっていうのは、相当なストレスだと思うぜ」

「そうかもしれない」僕は松平に同意した。「加藤さん、昔はちよくちよくクーパーのこと散歩に連れてってたらしいんだけど、おとしの暮れに当たっちゃったんだって。今はリハビリで大分よくなつたらしいけど、左足もちよつと引きずってるような感じだし……」
「なるほどなあ。ジジイに土佐犬の散歩はつらいわなあ。そこでそのじいさん、独り暮らしなわけ？」

「うん……時々息子さんが様子を見にくるんだけど、わしは一生自分の家を離れないってがんばってるらしい」
「待てよ。ということは……」

目はクーパーの茶色い後ろ姿を追いつつ、松平はぴたりと歩をとめた。

「まさかそのじいさん、家の中でくたばってるなんてことはないだろうなあ」

「まさか！」

悪い想像を打ち消すように、僕は首を大きく振った。

「いや、わかんねえぞ。あの犬……クーパー？ たっけ？ 多分あいつ、ハラ減ってたんだよ。そのカトーさんとかいうじいさんが死んで、エサをくれる人が誰もいないもんだから……」

「やめてくれよ。加藤さんはきつと生きてるよ」

「まあ仮に生きていたとしてもだ」松平は味のなくなったガムをべつと道端に吐き捨てた。「あの犬をとにかく捕獲しないと。俺にいい案がある。カイ、おまえもついてこいよ！」

松平はクーパーと離れた分をとり返すため、突如として走りだした。クーパーはといえば信号機の前で行儀よくお座りしている。信

号は今、赤だった。

「あの犬、すげえ頭いいのな。青になると同時に、信号を渡りはじめたぜ」

ヒューと松平が口笛を鳴らす。

「いや、大したもんだ。感心しちまうな」

「感心するのもいいけどさ」口からガムを吐きだすと、僕はそれを紙にくるんでポケットに入れた。「このままどこまでも追いかけても仕方ないよ。あの鎖をつかんで、加藤さんの家まで連れ戻さないと……」

「へへへ。だから言ったろ。俺にいい案があるって。ジャジャーン！」

松平はクーパーが信号待ちしている間に、角にある売店でパンを買っていた。五十センチほどもあるうかという、生クリームの入ったスティックパン。

「こいつをだな、こうするわけさ！」

松平はパンをちぎると、歩道を歩くクーパー目掛けて、それを投げつけた。

頭にパンをぶつけられたクーパーは、一瞬ギロリと振り返ったが、すぐにくんくん鼻を鳴らして、ぱくりとパンに噛みついていく。そしてもつとくれ、というような飢えた眼差しを僕らに向けた。

「よ、よーし。この調子だ。俺がクーパーにパンをやり続けるから、その隙にカイは鎖を手にしろ」

「わ、わかった」

しかし、クーパーの食欲はあまりに旺盛だった。松平がちびりちびりとパンをちぎっているのが我慢できなくなったのだから、最後には……。

「う、うわああっ！」

クーパーは松平に大きく前足を上げて飛びかかり、残り十センチほどとなったパンを奪っていた。

「大丈夫か、松平!？」

草むらに尻もちをついた松平は、パンを持っていた右手を不思議そうに見返している。無理もない。右の手首ごと食べられてしまいそうな勢いだっただから。

「松平。僕のランドセルに今日の給食のコツペパンが丸ごと入ってるんだ。それを早くとりだしてくれ!」

「わ、わかった」

松平は僕の背中のランドセルを開けると、急いでパンをとりだした。食料がなくなった時、次に食べられるのは自分たちだと信じて疑いもしなかった。

「カイ。このパンがもしなくなったら……」

コツペパンをちぎってクーパーに与えながら、松平が僕の耳元にささやく。

「さっさとずらかろっぜ」

「う、うん。でもどうやって?」

ごくり、と生唾を飲みこみ、僕は鉄の鎖を手から離れた。その僕のことを、クーパーが何故かジロリと睨む。

「そのフェンスを飛び越えて、学校の校舎がグラウンドに逃げこむんだ」

僕たちは結局、学校にまで歩いて戻ってきており、校庭を囲む緑のフェンスがすぐ真横にあった。でもこういう場合、ギャグ漫画なんかだと、逃げ遅れた人物約一名が、ズボンのお尻のあたりを噛みつかれるんだよな。

そしてコツペパンもあとほんの一握りという時、緑のフェンスの向こうから、あまりにもものんびりとした声があった。

「松平くんもカイくんも、そこで何してるんだい?」

フェンスから首から上をのぞかせた井家くんに向かって、松平が「しーっ!」と人差し指を立てる。

「助けてくれ、井家!俺たちを救えるのはおまえしかいない!」

井家くんは声をひそめる松平のことを、訝しげに見つめている。

「頼むからさ、助けてくれよ。俺とカイは今すぐいちにのさんで、フェンスを飛び越える。その間、この犬の気を逸らしてほしいんだ」
ところが、フェンスをゆうゆうと飛び越えてきたのは、長身の井家さんのほうだった。もう終わりだ、というように松平が僕の顔を見る。

「もしかして、この犬がおっかないのかい？大丈夫だよ。人なつっこそうな犬じゃないか」

井家くんは少しも恐ろしくない様子でクーパーに近寄ると、彼の茶色の毛並みを何度も撫でている。

「ほら、なんともないだろ？犬つてのは、人間が怖がりさえしなければ、どうつてことのない動物なんだよ」

「お、おまえ……度胸あるな」

松平は井家くんに倣うように、クーパーのビロードみたいな手触りの毛並みを撫でた。クーパーは気分を害した様子もなく、へっへつとだらしなく舌をつきだしているだけだ。そこで僕もおそろおそろ、クーパーの背中や頭、眉間の皺なんかを撫でた。

「こいつ、怖い顔してるけど、結構愛敬あるな」

「ハハハ。口の端に葉巻をくわえさせたら、まるつきりマフィアのボスだよ」

「いえてる」

僕は井家くんが冗談を言うのを初めて聞いた。考えてみたら、彼が笑うのを見たのも、初めてのようない気がする。

「それで、この犬どうするんだい？見たところ、どっかから逃げだしてきた犬みたいだけど」

「カイ。おまえから話せよ」

「うん」

僕たちは三人で肩を並べて歩きだした。クーパーの鎖を握っているのは井家くんだ。

「へえ。それじゃあまあ、このままカイくんがこの鎖を握って加藤さんっていうじっちゃんの家までクーパーを連れていけばいいんだ」

まるでバトンタッチとでもいうように、井家くんが僕に鎖を手渡す。クーパーは誰が自分の主人でも構わないというように、大人しくのっしのっしと歩くのみだ。

「じゃあ、俺は家の用事があるから、これ以上つきあえなくて悪いけど……」

井家くんは学校前の信号のところ、僕と松平に手を振った。そして僕たちふたりと一匹が信号を完全に渡り切るまで、彼はずっと手を振り続けていた。

「あいつ、そんなに悪い奴じゃないだろ」

松平は前をゆくクーパーに目をやりながら、隣の僕に言った。

「確かに井家家は六人も子供を抱えてて、超貧乏だったのは本当だけど、でもそれはあいつには関係のない話だと俺は思うんだよな。

いつも月末になると銭湯にいく金がない、メシもいつもの半分以下って状態になるらしいけど、あいつ、えらいと思うよ。俺だったら絶対、そんな生活耐えられないもんな」

そうだったのか、と思った僕は、松平から井家くんの家の事情を他にも色々聞いた。お父さんは腕のいい大工らしいけど、お酒を飲むと人が変わること、お父さんが賭博で作った借金があること、お母さんの内職を一家全員で手伝っていることなど……。

「えらいんだな、井家くんて」

僕は感心したように、溜息を着いた。

「そつだよ、あいつはえらいんだ。でもうちのクソツタレ女子どもときたら、頭ごなしにあいつをフケツ呼ばわりするんだからな。ヨツトスクールももうちょっとあいつらにガツンと言ってやりゃいいんだ。そうすればロリコン疑惑も消えてなくなるぜ」

松平は、僕と最初に会った公園、セキレイ公園、のところまでくると「じゃあな」と言って最後にクーパーの頭を撫でた。彼の家は製材所をやっていて、セキレイ公園のすぐ真向かいだった。それでおがくずなんかを拾い集めている時に、僕が神妙な顔つきで電

信柱に隠れているのが見えたのだそうだ。

「ありがとう、クーパー」

前をゆく茶色いでっかな犬に、僕はそっとお礼を言った。うまくいえないけど、とにかくそういう気分だった。もしクーパーが棒杭を力づくで引っこ抜いてなかったとしたら、僕が松平や井家くと親しい口をきくことはなかっただろう。

ところが、加藤さんちの前までいってみると、何か様子がおかしかった。どこがどうというわけではなかったけれど、なんとなくお庭が寂しそうというか。大きな花びらを散らしている薔薇や、枯れかかったクレマチス、しょんぼりしている鉄砲百合……そして家自体が何か月も人が住んでいなかったかのようにひっそりとしている。(まさか、松平の言うとおり、死……?)

一瞬ぞつとした僕は、隣で大人しくお座りしているクーパーと顔を見合わせた。だが彼の無愛想なぶすつとした顔からは、何も読みとることはできない。

僕は玄関のピンポンを何度も鳴らし、ドアを何度もどんどん叩いた。「かとうさん！かとうさん！」とおじいちゃんの名字を大きな声で叫んでもみた。だが応答はまったくなく。こうなれば、残る手段はただひとつだ。

「おかあさーん！」

クーパーとともに走って家へ帰ると、僕は息を切らしながら広い玄関に飛びこんだ。

「みずほ？あんた塾の時間……」
のれんをくぐった母さんは、クーパーの姿を見るなりぎよつと目を大きくしている。

「みずほ。あんた、まさかこの犬……」

クーパーは母さんにみなまで言わせなかった。何故なら彼は、ぴよんと玄関マットの上に飛びのると、母さんに何かを哀願するよう

に飛びかかっていったからだ。

「いやっ！やめてっ！一体なんなのよ、この犬。なんていやらしい……」

クーパーは腰くだけとなった母さんのことを押し倒し、その顔を隅から隅までベロベロなめた。上から降りてきた美月も、その光景を見て呆然としている。

「お、お兄ちゃん……」

クーパーは美月の存在に気づくと、今度は彼女に向かって突進した。妹は二階へ逃れようとしたが、なんと！彼は器用に階段を上っていった。

「いやああっ！」

バターンと何かが倒れる音がするとともに、じゃらじゃらという鎖の音が続いた。

「みずほ！早くなんとかしなさい！」

母さんの金切り声を受けて、僕は急いで二階へ上った。そこでは少女が土佐犬にレイプされかけており、というのはもちろん冗談だけど、僕はやっとの思いで妹からクーパーを引き離れた。

意外なことに妹は、最初は抵抗したものの、途中からはクーパーの愛撫を受け入れていたような節があった。でも美月はクーパーの興奮が納まってくると、プイと顔を背け、

「そんなえっちな犬、早くどっかへやっっちゃって！」

と怒ったように言った。

「つまり、そのいやらしい犬は加藤さんちの犬なのね？」

クーパーの足の裏を雑巾で拭く僕を、母さんが怖い顔で見下ろす。「うん、そう。でも加藤さんちへいったら誰もいないみたいなんだ。もし家の中で倒れてたりしたら、大変だと思つて……もしかしたらクーパーはそのことを誰かに知らせたのかもしいし」

「この犬がそんなにりこうだとは、母さんには思えないけどね」

母さんに冷たい目で睨まれても、クーパーにはなんらひるむ様子

はない。それどころか、一生懸命部屋中の匂いを臭いでまわっている。

「まさかとは思うけど、もしかして……」

そのまさかだった。僕は急いでマガジンラックから新聞をとりだすと、それをクーパーのお尻の下に敷いた。間一髪。ポトリ、といい匂いにするうんちが落ちてくる。

「みずほ！早くその犬を外に追いだしなさい！庭の花壇のところにも、鎖で縛りつけておけばいいでしょ！」

母さんの癩癪玉が破裂した。本当はもう少しクーパーと室内で過ごしたかったのに……せめて父さんが帰ってくるまでは。

「ええ、そうなんです。うちの息子が偶然見つけまして、今うちの庭にいるんですよ。ええ……それはわかりますけど。はい……はい。ではよろしくお願いします」

チン、と母さんが黒電話の受話器をおく。話の感じや母さんの表情なんかからすると、何かが芳しくないような雰囲気だった。

「加藤さん、二度目の脳梗塞でついきのう、お倒れになったんですって。今は意識不明の重体で、集中治療室のほうにいらっしやるんだそうよ」

「そっか……そうなんだ」

茶の間の窓からそっと庭をのぞき、どこか元気なくうなだれているクーパーを、僕はとても可哀想に思った。

「じゃあ、クーパーはどうなるの？」

美月は、つい先日加藤さんからもらった紫陽花の花を一房、手にとっている。

「そうね」と母さんが溜息を着く。「町内会長さんの話だと、息子さんと連絡がとれるまで預かってほしいんですって」

「やった！」

椅子から飛び上がらんばかりに僕はジャンプし、早速とばかり、プラスチックのいらぬ皿に夕飯のビーフシチューをかけた。もち

るん僕が食べるわけではない。クーパーにやって元気を付けさせるためだ。

「あらあら。犬なんかそんなにやっちゃん、みんなの食べる分がなくなっちゃうでしょ」

「べつにいいよ、僕。晩ごはん抜きでも」

そうなのだ。僕は今日、クーパーのおかげでいいことがふたつもあった。ひとつ目は松平や井家さんと親しい口を聞いたこと。そしてふたつ目は塾をさぼることができたことだ。

「しょうがないわねえ、まったく」

肩を竦めつつ母さんはテーブルに夕食の品を並べはじめ、クーパーにおまけとしてチキンナゲットを三つもくれた。

「ありがとう、母さん」

僕は喜びながらベランダへでると、どこかふてぶてしい表情をしているクーパーに、そのとつても美味しいエサをあげた。

「ふうん、クーパーか。なんだかFBIの捜査官みたいな名前だな」

その日、八時過ぎに帰宅した父さんが、窓から庭の犬を眺めてそう言った。

「えふびーあいつて？」と美月が舌たらずな調子で聞く。

「FBIっていうのは、アメリカの連邦捜査局のことだよ」

妹はあからさまに「あんたに聞いたんじゃないわ」という顔をしてるけど、僕はあえて気にしない。

「流石、みずほは物知りだな」

父さんはスーツからパジャマに着替えると、ダイニングキッチン
のテーブルに着いた。

僕や美月は勉強をしようとかゲームをしようとかとにかく父さんが帰ってくるなり、二階から先を競うように降りてきた。そしてその日あった事件やニュースのこと、父さんが記事にしたことなどを聞くのだ。

といつても、これは僕たちが札幌から釧路へ越してきてからの習

慣といったほうがいいかもしれない。札幌にいた頃は、父さんはほとんど僕たちが起きている間に帰宅したことはなかったからだ。そして夜中の十二時過ぎに帰ってきたにも関わらず、深夜の二時や三時に会社からの電話が鳴る、なんてこともしょっちゅうだった。

ところが、釧路へ引越してくるなり　父さんは大体八時から九時の間に帰ってくるが多くなった。僕も母さんも美月も、そのことがとても嬉しかった。札幌にいた頃の父さんは、家にいてもほとんど半分眠っているような状態であることがあまりにも多かったからだ。

第3章

突然だけど、僕の父さんや母さんは、ともに1960年代後半から1970年代前半にかけて青春時代を過ごしている。まだ青春という言葉が本当の意味で生きており、不純異性交遊なんていう言葉が、死語ではなかった時代のことだ。

そして1980年代後半から1990年代前半にかけて十代を過ごした僕は、父さんや母さんからその時代にあつた色々なことを聞かされて育つた。

日本の古き良き時代、とでもいうのだろうか。父さんや母さんは自分たちの青春時代について語りだす時、いつも決まってキラキラと目を輝かせる。

「父さんと母さんは、ススキノにあつたディスコで知りあつたんだ」

「アバのダンシング・クイーンがあの頃は流行つてたわねえ」

「君は超ミニのスカートをはいて踊つて、男の視線はみんな釘づけだった」

「あら。あなただつてとてもステキだったわ」

この太つたビール腹の父さんが、ディスコでダンス？

にわかには信じがたいが、当時のアルバムをめくると、そこにはほっそりとやせたハンサムな青年が写っている。

ダイエツト公告の使用前使用後じゃないけど、そのあまりの違いの大きさに、僕も美月も啞然と顔を見合わせた。

「ねえお母さん、結婚してからだまされたつて思ったことはなかったの？結婚してからこんなにまるまる太るだなんて、はつきりいつて詐欺じゃない？」

「そうねえ……でも父さんのこと、太らせたのは母さんだから。母さん、昔からすごく嫉妬深かったのよ。結婚して、父さんが太つてきたのを見て、逆にほっと安心しちゃったわ。これで浮気する心配はあまりないなと思つてね」

「そうだぞ、美月。男は顔でも体つきでもなく、ハートで選ばなくちゃ駄目なんだ」

当時から、自分の容姿の可愛らしさに自惚れていた妹は、どこか納得しかねるような顔をしてたけど、とにかく僕の父さんと母さんは、そんなふうにしてとても仲が良かった。

ただ僕は時々、逆に父さんはなんで母さんと結婚したのかな、と疑問に思うことがある。

アルバムを見ると、当時の母さんは確かに美人だ。いや、今も美人だと言ったとしても、決して言いすぎではないくらいだ。

でも どうしてこんなにガミガミうるさい女性と結婚したのか、僕には時々とても不思議でならなかった。

「ねえ父さん。父さんはなんで母さんと結婚したの？結婚する前はあんなガミガミ屋だって知らなかったから？」

「うーん……そうだな」

眠り眼で歯を磨いていた父さんは、何故かその時だけぱっちり目が覚めたようにこう言った。

「女ってというのはみんな、結婚すると変わっちゃうもんなんだよ」
そして父さんはタオルで口許を拭くと、「これは母さんと美月には内緒だぞ」と僕の耳元に囁いた。

小学生の子供をふたり抱える家庭の朝というのは、ある意味で戦争だ。母さんは自分の配偶者のために毎朝力の入ったお弁当を作り時々、学校給食の存在を神さまに感謝しつつ スボラな父さんのかわりに、きちんとスーツにブラシをかけ、ネクタイもきちんと趣味のいいのを選ぶ。

そして子供たちがごはんを食べている間に、きちんと時間割どおり物をそろえたかとか、宿題はやったかとか忘れ物はないかといったようなことを矢継ぎ早に聞く。

ここで何かを「忘れた」とか「そういえば」なんて単語がでてく

ると、母さんは半分くらいパニックになることが多かった。そして怒鳴る。

「どうしてきのうのうちに言わなかったの」

「どうしてきのうのうちに用意しなかったの」

「どうしてきのうのうちにやっておかなかったの」

僕は時々、母さんのことをガミガミ屋の教育ママゴンとして疎ましく思うことがあったけど、でも大人になった今では、あの当時の母さんの心境がどんなものだったか、ある程度理解することはできる。

加えていうと、母さんはとても心配性な質の人だった。母親っていうのはみんなそんなものだとは言うかもしれないけど、僕の母さんの場合は違う。病気の一步手前なんじゃないかっていうくらい心配性なのだ。

つまり、母さんはなんでも前倒しに前倒しをして石橋が壊れる寸前まで叩かないと気がすまないタイプの性格だった。ついでにいうと神経質で綺麗好き。嫌いなものはほこりとカビ。ゆえに掃除機をかけるのと拭き掃除は、母さんの毎日の日課みたいなものだった。

ここまで書けばもう誰にでもわかると思うけど、母さんとはかく父さんや僕や美月ができるだけ完璧な状態で外にでるまでは<義務>の二文字から解放されることはない。よって、僕たち三人はほとんど追いたてられるようにして学校なり職場なりへ向かうことになる。

そして二十一世紀初頭の現在に生きる僕は、当時を振り返ってこつとも思う。あの頃にはまだ、<不登校>という言葉がなかった。

また<引きこもり>という言葉も、今のようにある種の社会現象をさして使われてはいない頃だった。でも僕がもし小学生のこの時でも、あるいは中学生・高校生になってからでも、不登校になったり引きこもりたりするような事態になっていたとしたら、母さんは一体どうしていただろう。

夏休みまであと二日というこの日の朝　僕は意気揚々と学校へ向かった。松平はきつと、クーパーのその後について僕に聞いてくるだろうし、僕は井家くんとも仲良くするつもりでいたからだ。

美月は近所のミカちゃんやアスカちゃんと一緒に登校するので、学校まで歩く約二十分間、僕はひとりぼっちだ。でも僕自身はちっとも孤独でもなければ、少しも寂しくもなかった。登校途中に、加藤さんちの綺麗な庭にうつとりしたり、公園の白樺のさやさやいう音に耳を傾けたり、馬が放牧されている広い野原を眺めたり　家の一軒一軒の形や特徴について考察するのも大好きだった。

今日はちよつとばかり不吉なことに、かたつむりの死骸と毛虫が体液を流しているのと、大きなミミズのひからびたようなのに遭遇してしまっただけだ　僕は「ナムアミダブツ」と心の中で唱えて通りすぎるだけだった。

学校へ到着すると、いつものように騒ぎが起きている。うちのクラスでは毎度のことだ。

でも当時から感受性の強かった僕は、そうしたことに對する自分の微妙な心理状況といったものに、敏感に気づいてもいた。

つまり、みんなが井家くんについてわいのわいのと飽きもせず騒ぎ立てている間は　誰も孤立している僕に注意を払わないということだ。もしこれから井家くんが、何かの都合で転校するということになってもなつたとしたら……彼らのあの異様なまでのいじめエネルギーは、僕に向くことになるのかも知れない。

「みんな、やめろよ！井家くんが可哀想じゃないか」

そしてこれも毎度の光景だった。みんなが井家くんについてイカくさいだのなんだの言っていると、学級委員長の宇佐美正吉は割って入って井家くんいじめをみんなにやめさせる。それでみんなはしぶしぶ窓際の席を離れ、朝の十分学習の準備をするというわけだ。

今は朝に十分間、読書の時間が持たれたりしているそうだが、僕が小学生の頃は十分学習だった。本鈴の鳴る十分前に学習委員がプ

プリントを配るなり、黒板に問題を書くなりして、それをクラス全員が解くというわけだ。今日は漢字の書きとりで、僕は十問ある問題を、十分といわず三分ほどで解いた。

そして隣の女子とプリントを交換し、学習委員が黒板に書いた解答と答え合わせをしていると、前の席の笠原がこう囁いてきた。「今日の算数の宿題、あとで見せてくれないか」

「うん、いいよ」と僕は答え、机の中から算数のノートを取り出した。算数は一時間目なので、あとでというのはほとんど今すぐと同意だと思った。

「カサハラ、あんたたまには自分で宿題やってきなさいよ」

僕の隣の女子、渡辺真奈が十点満点のプリントを僕に返ししながら言った。ちなみに彼女の点数は九点。迷うが述うになっていたためだ。

「うるせえな。ワタナベには関係ねーだろ」

「ふん。そんなだからあんたには、男の友達がないのよ」

そのワタナベの一言に、僕はグサツとくるものを感じた。もちろん、彼女が言ったのは笠原勇希に対してではある。彼には井家くんを女子と一緒にになっていじめることによって、どうにかクラスでの面子を保っているような一面があった。

「カイクンも、お人好しはほどほどにしたほうがいいわよ」

僕はワタナベに何も言わなかった。ただ、べつに怒っているわけではないというしるしに、ちょっとだけ笑ってみせただけだった。

小学生の時も、中学生の時も、高校生の時も、はたまた大学生になつてからも、僕はしょっちゅう人からノートを貸してくれたの宿題を移させてくれたのという依頼を受けることが多かった。もちろんこれは僕の成績が常に優秀だったせいでもあるのだけれど、僕はそんなふうに関人から頼られることを、嬉しく思っていた。べつに優等生意識がくすぐられて気分がいいとか、そんな理由からではない。ただ僕は、今も昔も口ベタな上、非常に人見知りするタイプで、人

から何か話しかけられないかぎり、ほとんど自分から何かを話すということがなかった。つまりそういう人間にとっては　どんな理由にせよ、向こうからきっかけを与えてくれるというのは、嬉しくてたまらないことなのだ。

もちろん僕には、カサハラ之魂胆は腹の底まで透けて見えている。彼は僕を利用しているにすぎないし、彼と僕が無二の親友になつたりすることもまずないだろう。でも僕は小学生から大学生になるまで一貫して　彼のようなタイプの人間に腹を立てたことが一度もなかった。口先だけのお調子者の中には、何故だかどこか憎めない奴が多いものなのだ。とても不思議なことだけだ。

ところで、この日の一時間目の終わりから、井家くんいじめは鎮静化の方向に向かった。その理由が何故だったのか、僕にもよくはわからない。ただ僕が松平や平野と並んで井家くんの机を囲むと、ある種のバリアーがそこからは生じたようだ。

もちろんこのくらいのことでも水野沙夜香が井家くんと机をくつつけることはなかったし、聞こえよがしのフケツコールが教室中から消え去つたというわけでもない。でも少なくとも、松平や平野や井家くんや僕の耳には　そうした彼を揶揄する声は、五千メートル先の彼方で囁かれているもののようにしか、聞こえなかった。

僕は一時間目が終わった休み時間に、加藤さんが意識不明の重体であること、またクーパーが今もまだうちにいることなんかをみんなに話した。

「いいなあ、おまえら。きのう俺のいない間に、そんな面白いことがあつたのかよ」

平野は松平や井家くんがわけ知り顔なのを見て、とても残念そうだった。彼は野球部に所属していて、きのうの放課後は他校と練習試合があつたのだ。

「しかもきのうは試合に負けるしさ。あーあ……東小の連中ってい

つも汚ねえんだよなあ。ヤジばつか飛ばしてさ。それでこつちも負けじとメガホンで叫ぶことになるから、今日なんか声ガラガラだよ」「まあ、次があるさ」と、松平は平野の肩を慰めるように叩いている。

「じゃあ今日はさ、みんなでカインちに行かないか？俺もそのクーパーって犬に会ってみたいしさ。なんかカインちって面白そうだよな。家にどんな漫画があるのかとか、すげえ興味あるよ、俺」

そして僕が自分の家にある漫画の数々 『ドラえもん』、『怪物くん』、『パーマン』、『忍者ハットリくん』、『ドラゴンボール』、『うる星やつら』、『北斗の拳』なんかについて話していると、二時間目の始まる鐘が鳴った。

井家くんはその日、家の手伝いで僕のうちにくることができなかったけど、僕は松平や平野とこの日を境に急速に仲良くなっていった。松平や平野はしょっちゅう僕の家で漫画を借りたりゲームをしにきたりするようになったし おかげで僕は美月から「お兄ちゃん、いまだに学校で友達できないんでしょ」と凶星を指されてムカつくことがまったくなくなつた。

ところでクーパーの処遇だが、終業式の日僕が重い習字セットや絵の具セット、朝顔の鉢植えなんかを抱えて帰ると 家に保健所の職員がやってきていた。

母さんはあからさまにまずいという顔をしており、茶の間で麦茶を飲んでいたふたりの職員も、事情を大体のところ聞かされていたのだろう、どうしますか、というような視線を母さんに向かって投げかけている。

「こうするしか仕様ががないのよ、みずほ。加藤さんはもう意識の戻る可能性がほとんどないんですって。息子さんたちふたりも、犬のことは引きとれないっておっしゃってるし うちだって本当は、大家さんに断りもなしに犬を飼うってわけにはいかないのよ」

母さんのそうした大人の理屈を聞かされた僕は、一気に激昂した。

僕は普段は大人しくて聞き分けのいい子だけど、だからといってなんでもイエスというわけではないのだ。

「こんなのひどいよ、母さん。クーパーは確かに不細工で、あんまり可愛くないかもしれないけど、だからって殺すことないだろ」「べつに殺すってわけじゃ……」

母さんは白ずくめの職員ふたりに助けを求めたが、ふたりとも、ただ視線を逸らすばかりだった。

「じゃあ、あんたは母さんにどうしろっていうの。結局、クーパーにエサをやったりなんたりするのは母さんの仕事なんですからね。あんたは口では面倒みるっていうだろうけど、最終的に世話をするのは――」

僕はポロポロと涙をこぼしたが、母さんに対してなんの効果もなかった。母さんが軽く礼をして合図すると、ふたりは気のすすまな様子でソファから立ち上がっている。そして僕がさせるものかと急いでベランダに向かうと、そこにクーパーの姿は見当らなかったのだった。

（ いない！？ ）

まさかもうすでにトラックに乗せられてしまったのだろうか？ いや、ちがう。そうじゃない。何故ならクーパーを繋いでいた園芸用の杭ごと、彼はいなくなっていたのだから。

とりあえずよかった、と僕は思った。たぶん彼は自分の身に差し迫った危険の匂いを察知して、先手を打って逃げだしたのだ。

家の庭先にはキツネにつままれたような白い保健所職員ふたりと、母さんの姿だけがあつたけど。僕は彼らと一緒に近所を探しまわることなど、絶対にするものかと思った。

だが夕刻になると、クーパー失踪についての謎が、僕にも母さんにも自動的に解けていた。

犯人は、美月だった。

美月はたぶん、僕と母さんが言い争っているところへ帰ってきて、

そつと二階へ上がっていったのだ。そしてランドセルやパイプピアノなんかの荷物をおき、こっそりクーパーを連れて逃亡を図ったのだろう。

クーパーの鎖は園芸用の杭にぐるぐる巻きにしてあったから、じやらじやらという音を立ててはいけなれないと思つた美月は、杭を力づくで引っこ抜いて、そのままクーパーと一緒に逃げたのだと思う。

僕は下から母さんが何度呼んでも答えず、このまま父さんが帰ってくるまでハンストを決めこむ覚悟だつた。母さんは僕や美月のことを傷つけないために、僕たちのいない間に保健所の人を呼んだらしいけど、そして学校から帰ってきた僕たちに、クーパーは加藤さんちの息子さんが引きとりにきたと説明するつもりだつたらしいけど、その話を聞いた僕は、母さんのことをますます許せないと思つた。それから父さんのことも問いつめるつもりだつた。母さんがこのことを父さんに相談しないで決めるはずがないから、もしふたりがグルなら、僕は父さんのことも母さんのことも、死ぬまで一生許さないつもりだつた。

でも、夕暮れ時の空が過ぎゆき、あたりが宵闇に包まれる頃になると、僕も母さん同様、美月のことがだんだん心配になつてきた。きつと美月は保健所の職員が手ぐすね引いて自分とクーパーの帰りを待っていると思つたのだろう、だからあれから何時間しても戻らず、頃合を見計らつてそつと戻ってくるつもりでいるのだ。そう思いはするものの、流石にもう七時だ。僕は妹のことを探しにいこうと思つた。

「ええ、そうなのよ。保健所の人がかかるのが遅くなつたものだから、みずほに見つかつてしまつて……あなた、お願いだから早く帰ってきて」

母さんが父さんと電話で話しているのを聞いた僕は、やはりふたりはグルだったのだと確信した。それでわざとこっそり気づかれなようにドアを閉め、懐中電灯を片手に美月とクーパーを探すこと

にした。

母さんなんか、美月に続いて僕までいなくなったのを見て、せいぜい泣き咽ぶがいいと思った。実際に、僕と美月とクーパーが家へ戻ってきて、母さんが涙に暮れている姿を見るまでは。

美月とクーパーの居場所は、実をいうと僕には大体見当がついていた。誰も人がいない加藤さんちだ。

そしてふたりは案の定　正確にはひとり一匹だけ　加藤さんちの庭先にいた。

「おい、美月」

「……お兄ちゃん」

クーパーは僕の存在を認めると尻尾をふり、つぶれたような顔ののっそりと僕のズボンにこすりつけてきた。

「うわっ！おまえただ単に僕に、よだれをこすりつけたかっただけかよ」

僕が屈みこむと、クーパーは今度は、しゃぶりつくように僕の耳をなめまわしてきた。彼はたぶん一般受けしない顔立ちの犬ではあるのだけれど、どこか強く人を惹きつける性格をした犬だった。

「お兄ちゃん、ホケンジョヨの人、帰ったの？」

クーパーの小屋の横、はまなすの植えこみのそばに体育座りをしたまま、美月がぼんやりと聞く。

「ああ、帰った」

僕はクーパーをはさんで、美月と同じように土の上に座った。

「ずい分長い間、母さんと三人で近所を探しまわってたみたいだけどね　でもおまえ、よく見つからなかったなあ。こんなうちから目と鼻の先の距離にいて」

「うん……最初はね、できるだけクーパーと一緒に遠くまで逃げようと思ったの。だけど……」

「だけど？」

「公園でクーパーと一緒にベンチに座ってたら、みんながひそひそ

しゃべってるのが聞こえたんだ。トサ犬って、けんか犬なんだってね」

「ああ、闘犬って意味か」

僕は頭の中で百科事典のページを繰った。

「でもクーパーは大丈夫だよ。人をなめまわしこそすれ、噛みついたりなんか絶対しないって。それよかさ、早く家に帰ろうぜ。美月がいなくなってる、母さんもしょんぼりしてるよ」

美月はじゃらじゃらとクーパーの鎖を引きずりながら、どこか元気なくとぼとぼと歩きだした。クーパーが保健所いきになると、もしかしてまだ心配しているのだろうか？

「心配しなくても大丈夫だよ」僕は繰り返した。「母さんもだいぶ反省してるみたいだから、たぶん父さんがなんとかしてくれるんじゃないかな」

「うん……そうだね」

美月はクーパーと並んで歩くのをやめると、ふと足をとめた。クーパーも同時にその場に立ちどまる。

「お兄ちゃん、サベツって怖いね」

「差別って？」

「うん。今日、クーパーと一緒に歩いてて思ったんだ。みんながあたしやクーパーのことをさけて通るのはどうしてなんだろって。それで、思ったの。もしあたしの連れてるのが、マルチーズかなんかの小さいわんこだったら、たぶんみんな逃げたりせずに笑顔で近づいてきたんじゃないかって……」

美月はポロリと涙をこぼすと、そのままわつと泣きだした。じゃらり、と鎖がコンクリートの道端に落ちる。だがもちろん、クーパーは逃げたりなんかしない。

「お兄ちゃん、クーパーがかわいそうだよお。こんなに不細工な上、みんなからも嫌われて、ホケンジョの人に殺されるなんて、絶対かわいそうだよ」

「おまえねえ……」

僕はズボンのポケットからハンカチをとりだすと、それで美月の涙をふいてやった。

「クーパーはべつに、可哀想なんかじゃ全然ないさ。加藤さんはともクーパーのことを可愛がってたし、今は新しい家族もいる。これから僕や美月が加藤さんに負けないくらいクーパーのことを可愛がってやれば、クーパは少しも可哀想なんかじゃないんだよ」

「……うん」

美月はそれからもひつくひつくしゃくり上げながら泣き続け、クーパーはそんな彼女のことを気づかうように、下からのぞきこんでいた。額によつていするしわがまるで「どうしたの？」と聞いているような感じがする。

「さあ、早く帰ろう。クーパーのことはこれから、僕と美月で守るんだ」

「うん！」

月明かりの中、僕と美月は手をつないで歩き、クーパーもまた、僕たち子供の歩調にあわせて、トコトコ横を歩いていった。

「あんたたち！まったくもつ、心配させて……」

家に帰ると、涙に暮れる母さんの姿と、そのすぐ横にくたびれたような父さんのスーツ姿があった。八時前に帰ってくるだなんて、父さんにしては珍しいことだ。

「クーパーはどうした？」

僕は美月と顔を見合わせ、軽く肩を竦めた。

「連れて帰ってきたよ。花壇のところに、鎖でとめてある」

「そうか」父さんはドサリ、と重い体をソファに沈めると、ぐったりしたように天井を仰いでいる。

「クーパーのことは、アレだな。父さんがまあなんとか、面倒をみることにしよう」

「あなた！そんな安請け合いして、あとからどんなことになってもわたしは知りませんからね！」

母さんのふたつの瞳からは、信じられないくらい急速に涙が引いていた。茶の間のカーテンを開けてベランダをのぞきこみ、忌々しげにシャツと冷たく閉めている。

「生きものを一匹飼うっていうのは、本当に大変なことなのよ。しかもあんなおつきな犬。エサ代だけでもどのくらいかかるか……それに散歩はどうするの？病気になったら病院代もかかるし。動物っていうのは保険がきかないしね。あとお風呂にも入れなくちゃならないのよ。最初にはつきり言っておくけど、母さんは絶対に手伝いませんからね」

「まあまあ」と父さんがなだめても、母さんは肩を怒らせたまま、プイと横を向いている。

「みずほも美月も塾や習いごとがあるし、クーパールの散歩は俺がやるよ。まあ毎日ってわけにはいかないだろうが、休みの日には必ず散歩させよう。エサ代は俺の小遣いから削りとればいいよ。大家さんには明日、俺から電話しとくから」

「きつと、家賃の値上げを言い渡されるわ」

母さんはなおもベランダのほうを睨みつけたままだったけど、僕と美月は手を打ち合わせて喜んだ。さすがは父さんだと思った。これでクーパーは正式に、我が家の一員となったのだ。

第4章

さて、父さんは最初の公約どおり、実にクーパーの面倒をよくみた。「さて、調査官どのにエサをやるか」と言ってはベランダの窓を開け、「調査官どのを散歩に連れていくか」と呟いては夜中にクーパーと散歩へいった。お腹の贅肉がとれてちょうどいい、などと笑いながら……。

もちろん僕も美月も、なるべく母さんの手を煩わせないように、できるだけ努力した。でもそれはたぶん、父さんが仕事で疲れているにも関わらず、クーパーに色々よくしてやろうとする姿勢を見せてくれていたからなのだと思う。僕たちが昼間クーパーを散歩に連れていけば、父さんは夜、いつもどおり休むことができるし、その他エサをやるのもウンコを片づけるのも同様だった。

そして最初は「四千円も家賃を値上げなんて……」とぶつぶつこぼしていた母さんも、少しずつクーパーを可愛がるようになった。

クーパーは自分が内心嫌われているとはまったく思えない様子で、母さんがベランダに姿を現わすなり、おそろしい勢いで飛びついていくことが多かった。そのせいで、母さんはお気にいりのワンピースやカーディガンなんかを、三枚くらい駄目になっている。クーパーは口の端に味噌汁のつゆがついてようと、ハヤシライスのルウがついてようと、おかまなしに母さんに飛びついていったからだ。

そして母さんはそのたびに大いに怒ったが、その種のしみは何故か、クリーニングにだしても落ちないことが多かった。同時に、父さんに新しい服を買ってもらうコツをも、徐々につかんでいったようだ。

ところで、話は夏休みの頃に返るが、一学期の僕の通信簿は音楽と体育をのぞいてみんなAだった。今の子供たちの通信簿はどうなっているのか、僕にはよくわからないけど、僕の頃は学科別の成績の

他に、内申点というのがあった。そしてどういうわけか、その欄の<冷静に物ごとを判断して行動ができる>と<相手の気持ちを尊重することができる>のところにマスマスのしるしがついていた。その上、他の<みんなをまとめてリーダーシップをとることができる>や<独創性に優れている>などといった欄には、なんのしるしもついていない。

これはあくまでも僕の想像だけだ　内申点というのはかなりのところ、先生個人の心象といったものに左右されるものみたいだ。一学期の間中、僕は勉強ができるにも関わらず、ほとんど先生に懐かなかつた。これで僕がもし一言「先生、どうやったら僕、友達つくれるんでしょう」と涙ながらに訴えていたとしよう。そうしたら多分このふたつのマイナスは消えてなくなっていたものと思われる。邪推かもしれないけど、先生は成績表をつけながら、こんなふうに考えていたんじゃないだろうか　「カイは勉強ができて、どの教科もみなAかBだ。でもこいつ、俺になつかなくて面白くないんだよな……そうだ。そのかわりっていうてはなんだが、内申点にふたつくらいマイナスをつけてやるか」

もちろん、僕の考えすぎかもしれないし、勘違いかもしれない。

でも僕は通信簿を開いた時、そのふたつの内申点のマイナスを見て

瞬時にしてヨットスクールに敵意を抱いた。

二学期以降、僕はクラスの中心メンバーの一員として活躍するようになるけれど、それにも関わらずヨットスクールとは一線を画したままだった。それは何故かといえば、一学期の内申点、マイナスふたつのせいだ。

「宇佐美つてさ、やっぱ戸塚先生にとり入るのがうまいと思わんか？」　僕の部屋で一緒に勉強をしながら、だしぬけに松平がそう聞いた。彼はうちから近いところに住んでいるせいもあって、夏休みの中、ほとんど毎日遊びにくるようになっていた。

「うん。僕さ、内申点の<冷静に物ごとを判断できる>の欄と<相

手の気持ちを思いやることができる。の欄にマイナスをつけられた
んだけど、たぶん宇佐美くんのような奴がたくさんプラスをもらっ
たらうなってそう思った」

「そうだよなあ」

松平は頭の後ろで両腕を組むと、そのままごろりと横になってい
る。彼の漢字ドリルはあまり進んでないみたいだった。

「やっぱさ、世の中は要領のいい奴が勝つんだよな。べつに俺、う
さ吉のこと嫌いじゃないけど、井家に対する態度とか、明らかに間
違ってると思わんか？」

「うん、思う」僕は算数のワークノートを閉じながら言った。「で
も宇佐美くんは自分が間違いない正しいことをやってるって、信じ
て疑ってないよ。自分は気の毒でカワイソウな井家くんをかばって
る英雄だって、そんなふうに感じてるんじゃないかな」

「英雄ねえ……俺にはただの先生に対するゴキゲンとりにしか見え
ないけどな。カイさ、今度あいつのことギャフンと言わせてやれよ。
あいつ、相当おまえのこと意識してるみたいだぞ。自分よりもAの
数が多いんじゃないかってぼつりと呟いてたらしいし」

「宇佐美くんが？」

「ああ。平野から聞いた話だけだな」

松平はこれで勉強は終わり、というように14型TVのスイッチ
を入れている。どうやら彼はいつものように、勉強目的ではなくフ
アマミコン目的でうちに来たみたいだ。

『元祖マリオブラザーズ』、『マッピー』、『ゼビウス』、『グラ
ディウス』、『アイス・クライマー』、『ツインビー』、『ボンバ
ーマン』、『ドルアーガの塔』、『ドラゴンクエスト』、『イ・ア
ル・カンフー』、『スパルタンX』などなど、あるいは今は懐かし
のディスクシステムのフロッピィに至るまで、僕の家にはたくさん
のファミコンのカセットがあった。

『アイス・クライマー』や『ツインビー』、『クルクルランド』な
ど、2プレイで遊べるものは一緒にやり、また1プレイヤーでしか

遊べないものを相手がやっている時は、僕は隣で漫画を読んだりした。

ファミコン スーパーファミコン プレイステーション……というようにゲーム機が移り変わっていく中で、ある一部の大人たちは今時の子供たちの遊びを「貧しい」と言うようになったけど、僕は自分の子供時代を振り返って、とてもバランスがよくとれていたように思う。

2Playでプレイできるものについては、僕や松平、また井家くんは互いに協力しあって次々と面をクリアしていったし、当時は子供たちの間でウラワザを教えあう、ということもとても流行っていた。また片方が傍らでこうすれば敵を倒せるということを知っていたり、どうしても自分の力だけではこれ以上先に進めない、倒せないボスキャラがいる、といったような場合には、僕のかわりに平野や松平がなんとかしてくれたものだった。

ゲームについてある一部の大人たちは、ひとりの世界に入りこむ、デンジャラスボックスだというように指摘するけど、僕は必ずしもそうとは思わない。ゲームの与えてくれる夢や感動はとても素晴らしいものだし、実際のところ僕は、成長の過程でゲームから著しくたくさんの良いものをもらった。

加えて、僕が子供だった頃は、外にでて遊ぶ機会がかなりのところ多かった。

この小学三年の時の夏休み、僕は松平や平野や井家くんと自転車に乗ってよく冒険へでかけた。特によくいったのは、動物園まで続くサイクリングロードだ。途中で第一休憩所、第二休憩所と呼ばれる公園のような場所がある。動物園までは十キロ以上あるため、小学生の足にはかなりキツイが、僕たちは朝早起きして動物園へと自転車ででかけたこともあった。

小学三年の時の夏休みと小学四年の時の夏休みのことを、僕は今でも鮮やかに思いだすことができる。山にクワガタ虫やバッタやトンボをとりに行ったこと、川でヤマメ釣りをしたこと、みんなで公

園に集まって花火をしたことなど……数えきれないほどたくさん
思い出がある。

そして小三と小四のある一時期、僕は塾通いをまったくしていな
いことさえあった。内申点にマイナスのしるしがないかわりに、A
の数はそのせいで減ったけど　しかも宇佐美くんテストの点数
を見られ、「勝った」なんて横で言われたこともあったけど　僕
はそんなこと、少しも気にしなかった。もちろん母さんはアヒルみ
たいにガアガアうるさくはあった。ゲームをやる時間も減らされた。
でもそれ以上に僕は、松平や平野、井家くんと一緒に遊ぶのが楽し
くて仕様がなかったのだ。

しかし、悲しいことに僕は、小四の終わりに再び札幌へ戻ること
が決まり　彼らと離ればなれにならざるをえなかった。そして札
幌へ戻ってからは、僕は塾をさぼるといふこともまったくなくなり、
中学と高校は脳細胞みたいに灰色な時代となつたわけだ。

「おまえんちの妹って、可愛いよな」

平野がだしぬけに言ったので、僕はコントローラーの操作を誤っ
てしまった。あわれマリオ、クッパ大王の火球を食らって死す。

「あんな頭のおかしい妹、一体どこがいいんだよ」

僕は松平に2のコントローラーを手渡しながら言った。

「あいつ、はつきり言ってチクリ魔だぜ。僕が塾をさぼって遊びに
いったとか、『パーマン』のガンコ並みに告げ口するんだから」

「べつにいいじゃん、あれだけ可愛ければ。井家だつてそう思うだ
ろ？」

「う……うん」井家くんは『週刊少年ジャンプ』から顔を上げて言
った。「でも俺、カイくんの妹に会ったことないし」

「今度会ってみるよ。可愛いぞお。映画の『キョンシー』にでてく
るテンテンちゃんにそっくりなんだ。そういえば井家っておにゃん
子クラブの河合その子が好きなんだっけ？じゃあちよっとタイプは
ちがうかな」

井家くんは黙って雑誌のページをめくり続け、平野には何も答えなかった。無理もない。彼は前に笠原から強引に好きなタイプのタレントを聞きだされていたことがあった。そして笠原が「井家が好きなのは河合その子！」と大々的に発表すると、女子たちはみな「身のほど知らず」というような冷たい目で彼のことを見たのだった。

「うわっ！やられた！」

松平がイカの怪物、ゲツソーにやられていると、ピンク色のカーテンが突然シャツと開いた。平野の視線が美月に釘づけになる。

「お兄ちゃん、お母さんがこれ、みんなで食べなさいって」

むっつりとした顔をして、美月がケーキやクッキーなどののったお盆を差し出す。ほとんど毎日のようにお菓子やジュースを運ぶ係をやらされているので、面白くないのだろう。

「それから、ちよつとこつちきて」

次は自分の番なのに、と思いつながら、僕はしぶしぶ妹の命令に従った。タイムのボタンを押し、コントローラーを平野に手渡す。彼は『スーパーマリオブラザーズ』の達人なのだ。

「なんだよ？」

「あだし、前にも言ったけど」と、美月は廊下にでると両手を腰にあてた。「こう毎日毎日お兄ちゃんの友達が遊びにきたんじゃ、あたしの友達を呼べないでしょ。いつもいつもミカちゃんやアスカちゃんちに行くってわけにいかないんだから」

僕はわざと大袈裟に、肩を竦めてみせた。まるで映画にでてくる外人の俳優みたいに。

「どうせおまえがこの部屋でやるのなんて、バービーとかリカちゃんのお人形ごっこだろ。『わたし、イサムくんにデートに誘われちゃった』、『じゃあおめかししなくちゃね』……そんなくだらしないこと、よそでやってくれよ」

あまりにも僕が馬鹿にした態度にでたせいだろう、美月は顔を真っ赤にして下へ降りていった。

「お兄ちゃんなんか、もう知らないからっ！」

ボタン、と勢いよく茶の間のドアが閉まる。でも僕はといえば、久しぶりに妹に勝つことができた喜びに、酔い痴れていた。

邪魔者に勝ったことを祝って、ピンク色のカーテンも大きく開くことにする。

「美月ちゃん、なんだって？」

ピーチ姫を無事クツパ大王より救出した平野は、にんまりピースしながら言った。

「もし俺らがいるのが邪魔なら、明日は俺んちきてもいいぜ。それがプールに行くか、チャリンコででかけるか……どうする？」

松平は水中戦で苦戦しているため、聞く耳を持っていない。井家くんは『ジヨジヨの奇妙な冒険』から顔を上げると、

「明日は俺、家の用事があるから」と言った。

「家の用事って、母さんの内職か？」

「いや、雑品回収の親父に言われてんだ。最近何も持ってこないけど、銭いらねえのかって。俺、一応お得意さまだから」

「雑品回収？」

面白そうだと思った僕は、井家くんにおうむ返しに聞いた。

「まあ、カイくんにはこんな話、関係ないと思うけど」と照れたように井家くんは前置きしている。「古新聞とか空ビンとか色々、俺たくさん集めてんだ。ああいう雑品回収の汚い親父が家をまわるより、貧乏くさい子供のほうが集まりがいいんだよ。ビール瓶一ケースとか、気前よくたくさんくれる人もいるしさ」

「ようするに、チリ紙交換みたいなもの？」

「うんにゃ」と、井家くんは口をもぐもぐさせている。「このお菓子、すごいまいね。こんなの俺、はじめて食った……チリ紙交換は、物をもらったかわりにティッシュなんかをやらなきゃいけないだろ。でも俺は、とにかくなんでもたたでもらうんだ。あちこちの庭や物置のまわりを見て、ビンや漫画の雑誌なんかがあったら、こっそりいただいでくることもある」

「えっ、それってもしかして……」

「泥棒なんじゃねえの？」

聞きにくいことを、平野がズバリと指摘する。

「うーん、どうかなあ」チョコレートケーキに手をのぼしながら、井家くんは首をひねっている。「でも俺、自分が人のものを盗んでいるとは思ったことないよ。物置のあれくさって言って、断られたこともないしなあ」

「そうなんだ」

何故か僕がホツとしていると、平野がすつくと横で立ち上がった。

「よし、決めた！明日はみんなで雑品回収しようぜ」

「うん、いいね」

「うわっ！またやられた」

松平が絨毯の上に引っくりかえる。ゲームオーバーだ。

そしてあまりにもゲームに熱中しすぎていた彼は お盆の上にケーキが一切れも残っていないのを見て、がっくりとうなだれた。母さんの作るチョコレートケーキやクッキーは、いつも子供たちに大人気だったからだ。

夏休みも中盤をすぎた、八月十日というこの日 実家の押し入れから日記帳を探しだして確認した 僕と平野と松平は、近所中を歩きまわって古新聞やビンなどを探した。まずは自分の家の物置から開始して、井家くんが雑品屋の親父から借りてきたリヤカーにそれを乗せた。

実に残念なことに、母さんは定期的にチリ紙交換を利用しているため、戦利品は乏しかったが 松平はビール瓶を一ダース近く、平野は両手に持ちきれないほどの古雑誌を、ヨロヨロしながら持ってきた。

しかし、古雑誌や雑品といったものは、意外にありそうでないので、こうなったらやはり頭を下げて歩くしかないと思った僕たちは、四人ばらばらになって、一軒一軒のお宅をまわることにした。

井家くんの言っていたとおり、くれるという人は特にしぶることもなく、なんでもただで気前よくくれるのがとても不思議だった。もちろんそれは僕が子供だったせいかもしれないけど、でも不思議と僕は、家をまわって歩くうちに人の顔を一目見ただけで、この人はくれるとかくれないとか、そうしたことがわかるようになっていた。そしてどうも、問題はティッシュと交換するかどうかではないらしいということも、だんだんわかっていった。

僕と松平と平野、そして井家くんは、午前中からお昼ごはんをばさんで、午後も働き続け、日の暮れる六時頃に雑品屋の親父にリヤカーを返しにいった。リヤカーは底が抜けるくらいの大荷物だったけど、四人で引いたり押ししたりすれば、べつにどうということもない重さだった。

井家くんの言ったとおり、なんとも汚らしい感じのするゴミの山に暮らしている親父は、リヤカーの古新聞やビンの山、中古のラジカセなんかを見て驚いていた。

「おっさん。鳥取 丁目のミソサザイ公園の横にある空き地に、もうかれこれ半年以上置きっぱなしになってる軽乗用車があるんだってさ。この情報をくれたのは平野くんだから、平野くんに情報提供料をやってくれよ」

「ふむ、わかった」

ひげもじやの親父はケチくさそうな瞳を光らせると、電卓を叩いている。

「まあ、この品物全部と情報提供料を合わせて、五百円ってところだな。ほら、これやるから喧嘩しないでわけろ」

「五百円も!？」

井家くんはキラキラと目を輝かせていたけど、僕と松平と平野は三人で顔を見合わせた。

お互いの顔には、こう書いてあった。

(これだけ働いて、たったの五百円ぽっち?)

そして帰り道で、みんなでそれを分けようということになったわけだけど　平野は自分の情報提供料の分は勘定に入れなくていいと言った。

「べつに俺、いつも学校へいく途中に捨てられた車を見てただけからなあ。はつきり言っつて、べつに全然カンケーねえよ」

平野の男らしさが乗り移ったように松平も、

「俺もべつに、百二十五円ぼっちの金が欲しくてやったってわけじゃないな」

「うん、僕も。そのお金は井家くんがとってくれていいよ」

「本当にいいのか!？」

井家くんはひとり目を輝かせていたけど、僕と平野と松平は、疲れた溜息を着くだけだった。あんまりたくさん歩いたり、重いものを運んだりしたせいだ。でも僕はみんなと肩を並べて影法師を踏みながら、こつこつも思った　最初は気づかなかつたけど、僕たちはたぶん、井家くんの喜ぶ顔が見たくて、雑品回収なんていう慣れない仕事をしたんじゃないかって。

第5章

ところで、この日家に帰った僕を雷が待ち受けていた。べつに塾をさぼったからでも、クーパールの世話をしなかったからでもなく、妹が母さんに

「お兄ちゃんたち、なんかハンカくさいことやってるみたい」とチクツたためだ。

「まったく、あなたは恥かしいと思わないの！？近所中に物乞いをして歩くなんて……」

「べつに、恥かしくないけど」

僕に反省の色がまったく見えないのを見て、母さんはますます怒りを募らせた。

「あんたが恥かしくなくても、母さんは恥かしいわ。今日、ミウラさんの奥さんに言われたのよ。『最近だんなさんのことお見かけしませんけど、もしかして……』って意味ありげに。美月の話を聞いて母さん、やっと合点がいったわよ」

美月が母さんのエプロンの後ろでアツカンベーをしている。ようするに、きのうの仕返しというわけだ。

「母さん、べつに僕は自分のことを棚に上げるわけじゃないけど、美月のこともたまには叱ってくれよ。僕がアレしたとかコレしないとか、こいつの密告ぐせは大人になったら大変なことになるよ。人から嫌われて、誰にも相手にされないかもしれないじゃないか。今のうちに直すよう躱けといたほうが……」

のちのちのため、と僕は言いかけたけど、その言葉は美月の泣き声によって阻まれた。

「美月、ちゃんと友達いるもん。お兄ちゃんこそ、新しい友達ができたのなんか、つい最近のくせに……」

「そうね、美月ちゃん。悪いのはお兄ちゃんだから気にしないの」
エプロンで妹の涙をぬぐう母さんの姿を見て、僕は面白くないも

のを感じた。

（なんだよ、いつも美月ばかり）ってそう思った。

でもとても不思議なことに　美月は大人になるまでずっと、母さんは僕のことばかりを可愛がるって、そう思っていたらしい。そして僕はといえば、母さんも父さんも美月のことばかりえこひいきするって、そう信じて疑ったことがなかった。兄弟というのは実に不思議なものである。

それと美月の密告を抜きにしても、母さんはこのところ至極機嫌が悪かった。三浦さんの奥さんが「最近ご主人の姿を見かけませんけど……」と言っていたとおり、父さんの生活が八時頃の帰宅ではなく、以前と同じ十二時頃の帰宅になることが多くなったためだ。もちろん休みの日にはクーパーを散歩に連れていってくれるし、「そろそろ閣下を美容室に連れていくか」と言っておんにゃん美容室へ連れていってもくれた。動物病院で打つワクチン注射の費用も、父さんが貴重な小遣いの中からだしてくれたいし　僕や美月の目には、父さんは以前と変わらぬいい父親として映っていた。でも母さんにとってはどうも、少し違ったみたいだ。

「ねえクーパー、あの人のことどう思う？このごろ帰りが遅いけど、あたしは仕事だとは思ってないのよ。近ごろ何を聞いてもうわの空だし……もちろん仕事が大変だっていうのはわかってるわ。あなたの面倒だつてきちんとしてくれるしね。でもあたしはちょっとさくなくさいなつて思ってるの。たぶんあなたの面倒をよく見てくれるのは、何か自分にやましいことがあるからなのよ。最近あつちのほうもすっかりご無沙汰だしね……」

庭でシャベルを片手に、母さんはクーパーとそんな話をしていた。もちろんベランダの後ろの室内で、僕がひとりと一匹による会話を聞いているとは、ふたりとも気づいていない。

（　父さんが、浮気！？）

こっそりと足を忍ばせて茶の間をでると、僕は急いで二階の子供

部屋へ上っていった。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

息を弾ませている僕を、怪訝そうに美月が見上げる。妹は港まつりで父さんが釣り上げたヨーヨーを、人差し指にはめているところだった。彼女の机の上には他にも、同じく港まつりの露店で父さんに買ってもらったぬいぐるみやおもちゃのアクセサリセットなんかがある。

「……いや、なんでもないよ」

ついでにいうと、僕の机の上には、父さんに輪投げや射撃なんかでとってもらった、おもちゃの拳銃や手錠なんかがあった。これでクーパーという名の警察犬を連れて歩けば、僕は完璧ポリスマンだ。そして警察官というものには、大きな役目がある。不正を正しい方向へ導くという職務が。

「あのさ、美月」

カーテンを開けると、僕は美月に思いきって聞いてみることにした。

妹は真珠のネックレスをつけ、イヤリングをし、頭にはティアラのような形をしたヘアバンドを着けている。

「もし　もしもだけど、父さんが浮気をしたとしたらどうする？」

「ウワキって、もしかしてプールなんかで使う……」

「それはウキワだろ。僕が言ってるのは『三年目の浮気』のウワキだよ」

「わかってるってば。ただ言ってみただけじゃないの」

美月はパラロイドカメラを僕に手渡すと、ポーズをとりはじめている。お姫さまになった自分を撮れってことだ。いつも馬鹿馬鹿しいと思っているのに、逆らえないのは何故なのだろう。

「あんなでぶつちよりんのおじさん、まともな女が相手にするはずないじゃないの。まあ隣の頭イカレたおっさんが、離婚歴ありつてのにもびっくりしたけどね」

さまざまなポーズを五枚ほど撮ったのち、僕はカメラを美月に返

した。彼女の将来の夢はモデルだったけど、僕はまず無理だから諦めると、口をすっぱくして言っている。

「まあ、そつだよな」

再びカーテンを閉めると、僕は自分の思いの中に沈んだ。僕が母さんの話を聞いてしまったのは偶然だけど、これは甲斐家の長男として解決しなければならぬ問題だと感じた。妹はませているとはいえ、まだ小学一年生だ。もし仮に父さんが浮気してるにしても、真実を知るには早すぎる年齢だ。

（そつか……そつだったんだ。父さんがクーパーの面倒をよくみるのも、僕や美月におもちゃを買ってくれたりしたのも、愛人がいることに対する罪悪感を紛らわすためだったんだ。それで母さんは近ごろ、ずっと不機嫌だったんだ……）

僕は夏休みの課題の絵日記帳を開くと、色鉛筆を手にとった。でも駄目だと思った。とてもじゃないけど、本当のことは書けやしない。

「今日僕が野球の試合の応援から帰ってくると、母さんが庭で犬のクーパーと話をしていた。その話によるとどうも、父さんは浮気をしてるらしい。相手の女の人は同じ新聞社の女性なのだろうか？それとも飲み屋のママさんなのだろうか？このことについて、僕には真相を究明する権利と義務がある。母さんのためにも、また妹の美月のためにも、甲斐家の長男として……」

でも僕は宿題の日記帳には、野球の試合の絵を書いた。上の文章はあくまでも、僕の心の日記帳に書き記された言葉だ。

「今日僕は、野球の応援に行きました。平野くんがヒットを打ったのが、とてもカッコ良かったです。結果は5-3で負けてしまったけど、とてもおいしい試合でした。監督のオギワラ先生が、一生けんめい応援した僕や松平くんや井家くんにもラムネをおごってくれた

のがとてもうれしかったです」

まあこんなところでいいだろうと思った僕は、絵日記を閉じた。それよりも、と部屋の時計に目を走らせる。五時三十分。父さんがもし今日も、八時と九時の間に帰ってこなかったとしたら僕はクーパーと一緒に、明日父さんのことを尾行するつもりだった。よくよく考えてみると、何故これまで気づかなかったのだろうと思う。父さんは帰りが遅くなったばかりでなく、休みの日はいつも出歩いてばかりいたではないか。午前中にクーパーを散歩に連れていくと必要最低限の義務はこれで果たしたとばかり、ワゴン車に乗ってどこかへ出かけていく……。

このごろ僕は友達と遊ぶことが忙しくて、母さんの監視の目をかいくぐることは十分に神経を集中させていたけど、これは甲斐家存亡の危機ともいうべき事態だと思った。

(それに、父さんが浮気しているとまだ決まったわけじゃない。神経質すぎる母さんの勘違いっていう可能性も、十分ありえるんだから……)

明日、父さんがパチンコ屋にでも入っていく後ろ姿を見て、僕は早く安心したいような気持ちでいっぱいだった。でもそんな息子の心配をよそに、この日父さんは 十二時過ぎどころか、午前の二時近くに帰ってきたのだった。

「お父さん、今日は僕がクーパーを散歩に連れていくからいいよ」「ん？そうか？」

自分の会社の朝刊を閉じると、父さんはぼんやりソファから立ち上がった。やっぱり母さんの言っていたとおриだと思った。父さんは新聞など決して読んじやいない どちらかというと、新聞で顔を隠しつつ、いつつまく家からでていこうかと、算段しているような様子だった。

朝ごはんを食べている時も、心ここにあらずといった調子で、父

さんの目にはまるで母さんが透明な家事ロボットか何かのようにしか映っていないみたいだった。

「そろそろこのプログラムには飽きてきたから、別のプログラムを施行してみようか」

なんて、そんなふうに父さんが思っているとはもちろん思わなかったけど、透明人間を相手に食事をするというのは、実に味気ないものだ。

「今年のお盆休みは札幌に帰れないけど、お義母さん、気を悪くしたりしないかしら？」

「ああ、そうだな」

「あなた、砂湯へ子供たちをキャンプに連れていってくれるのはいけど、まだ準備しなくてもいいの？」

「まあ、そのうちやるよ」

ちなみに、砂湯へキャンプに行くのは二日後の十四日だ。キャンプ用品なんかは押し入れからだせばいいんだけど、薪とか花火とかその他色々、買いたしにいかなくちゃならないものがたくさんある。

「そのうち、ね」

いつもならここで「あなた、先週も同じこと言ってたじゃないっ！」と雷が落ちるところだけど、母さんは珍しく大人しかった。

子供の僕としては、キャンプへ行く二日後までになんとか、父さんと母さんには以前の関係に戻っていて欲しいと願ってやまなかった。何故ならそのキャンプには井家くんや松平や平野も同行する予定だったからだ。

これでは一体なんのために僕が友達も一緒にと必死に頼んだのか、まるでその意味がなくなってしまうのではないか。

「ちょっと、出掛けてくるよ」

そわそわした様子の父さんに、母さんはあえて何も答えない。父さんは戸棚からマイルドセブンを一箱と札入れをとりだし、ズボン

のポケットにそれらを忍ばせている。

(さあ、尾行開始だ！)

僕は父さんよりも先に外へ出、青色のリードを片手に、ベランダのほうへ回った。ごはんにお味噌汁をかけたものを食べたクーパーは、満足そうに輪になって眠っている。

すずめたちがごはんのおこぼれにあずかるとたくさんやってきていたけど、クーパーは気づかないふりでもしているように、両目をかたく閉じている。

「クーパー、散歩へいくぞ」

青いリードと散歩という言葉に、クーパーのどんよりとした瞳が輝く。まるでこの瞬間のためだけに生きている、とでもいうように。クーパーがのっそり動くと、すずめたちは四散していったが、ベツに心配することはない。彼がいなくなつたあと、鳥たちは再び戻つてきて、米粒をひとつ残らず啄ばんでいくだろうから。

ところが、父さんが隣のイカれた親父と　この形容はもちろん美月のものだけど　長い間話しこんでいたため、僕の計画は多少狂った。

クーパーの首輪にリードを繋ぐと、彼は鼻息も荒く、すっかりその気になっている。その彼をレンギョウの木陰にひそませておくというのは、なかなか至難の業だった。

「今の時期は何が釣れるんですか？」

「ヤマメとかニジマスとかイワナとか、まあなんでも釣れますよ。釣り場のポイントさえ知っていればね」

僕たちと同じ家に住む、鳥の巣頭の親父は、釣竿のリールを巻きながら、得意げに笑っている。そういえば先週おっさんのくれたヤマメの天麩羅は、最高に美味しかったっけ。

「俺も透析さえなければあ、もつと頻繁に釣りにいけるんだけど、何分こんな体なもんだからなあ。そのせいで、女房にまで逃げられちまった」

「きつとまた、何かいいことありますよ」

「だといいがなあ。まあ、たくさん釣れたらまた、おすそわけしますよ。そういえばこの間、お嬢ちゃんに冗談でペンギンを釣りにいって言ったら、なんか本気にしたらしくて、隣の親父は嘘つきだってお兄ちゃんに大声で言っていましたっけねえ」

「ははは。クーラーボックスから冷えたペンギンがでてくると、信じて疑ってなかったみたいですよ。でも先週のヤマメの天麩羅は本当に美味しかった。今度、一緒にいける機会があるといいんですが」

「休みさえ合えばね。同じ新聞屋でも、俺は夜働いてるからなあ」

ふたりはそのあと世間話をし続け、父さんがワゴン車に乗りこんだのは、ゆうに二十分も経ってからだった。

隣のおっさんがカーリーナのトランクに胴長や釣り道具なんかを積みこんで出ていくのと、父さんのタウンエースにエンジンがかかるのはほぼ同時だった。そして僕もあくまでもさりげなく、レンゲツツジの木陰からクーパーとでていき、父さんの運転する銀の車体を追いかけてようと思った。

もちろん、生身の人間が走って一台の車を追いかけるなんてのは、ほとんど不可能というか神業だ。でも実はここからがクーパーが本領を発揮するところなのだ。

「いいか、クーパー。父さんのワゴン車を追うんだ。そう、あの銀色の車だ。さあ行くぞ！」

父さんはサイドミラーに映る僕とクーパーの姿を見て、窓から手を振っていた。たまたま散歩の方向が一緒なだけだと思っただろう。車と僕たちの距離は当然どんどん離されていったが、クーパーは父さんの後を追うのをやめはしなかった。

そしてこの中で一番つらいのはもちろん僕で、五分くらいは全速力で走ることに耐えられたものの、それ以上は無理だった。でも僕の手が青いリードを離れても、ノリにのってるクーパーはそのままハッハッと息を弾ませ駆けていく。

「おおい、クーパー！」

最後にはヨレヨレの汗だくになりながら、僕はクーパーの茶色い後ろ姿を追った。実をいうと、あの車の後部席には、きのうのうちにあるものを入れておいたのだ。

クーパー愛用の小屋のざぶとん　僕が夜、それをとりあげると、クーパーは親の仇でも見るような目つきで、それをとり返そうとした。そして僕は彼の目の前で、ざぶとんをワゴン車の後ろへ放りこんだというわけだ。

一晩たったら忘れているかもしれないと思ったけど、どうやらクーパーはすっかり覚えていたらしい。犬は受けた恩を三年は忘れないうというが、とられた大事な敷物のことは、一生忘れないものなのだろう。

自分の作戦がうまくいったことを喜びつつも、これでクーパーを見失ったら元も子もない。僕は苦しいブルドックのような顔つきになりながらも、懸命に走り続けた。ただひとつの救いは、父さんの向かった場所が、鳥取の家とそう遠く離れていなかったことだろうか。

当時そこには、子供たちの間で非常に有名な、幽霊屋敷が建っていた。いかめしい門構えの、黒い瓦屋根をした、時代劇にでもでてきそうな感じのする大きな屋敷だ。庭には松の木や杉の木なんかが植えられていて、結構な高さを誇っている。ただし、門にはしっかりと釘と板で封がされているため、おいそれと人が侵入することはできない。

平野や松平、井家くんの話によると、この家では不幸が続いたため、家の主人は屋敷を封鎖することにしたのだそうだ。もちろんこの話はあくまでも、子供たちの間に一般的に流れていた噂話なので、どこまで信憑性があるかというのは極めて疑わしい。

なんでも、この屋敷の主人は大金持ちのヤクザで、その奥さんはノイローゼで亡くなったのだそうだ。子供によっては「ノイローゼじゃなく、あたしは狂い死にしたって聞いたわ」という者もいたけ

ど、まあどちらにも似たようなものだと思う。そしてその奥さんがこの屋敷で死んでからというもの、ここでは悪いことが度重なるようになり、犬が窓から飛びおり自殺をするなどは屋敷を封鎖することにしたというのだ。

犬が飛びおり自殺というのも、なんともいえないものがあるけど、子供たちの間の噂をすべてまとめるとしたら、大体次のようになる。

- 1．この屋敷の所有者がヤクザだということ。
- 2．奥さんが精神を病んで、首吊り自殺をしたらしいこと。
- 3．事故か自殺かわからないけど、とにかく犬が二階の窓から落ちて死んだこと。

この三つについては、どうやら事実のようだった。中にはヤクザの奥さんが自分の愛犬、一説によるとダルメシアン、を二階の窓から放り投げて殺したのち、自らも首を吊って死んだという者もあつたけど、あまりに本当すぎて、かえって僕はそこに作り話の匂いを感じていた。

まあ子供たちの間で有名な、呪われた幽霊屋敷の話については、ひとまず脇に置いておくでしょう。

今大切なのは、僕の父さんが呪われた幽霊屋敷の斜め裏にあるボロアパートへ入っていったということだ。

僕が呼吸器不全で倒れる寸前に陥りながらも、しつぽを振るクーパーになんとか追いつくと、彼はワゴン車のまわりをぐるぐるまわりながら、時々窓のあたりに前足をかけたりしていた。

「しーっ。クーパー、大人しくしろ」

幸い、車の鍵は開いていたので、僕はタウンエースの中からクーパーお気にいりのざぶとんをそつとりだした。

くんくんと匂いを嗅ぎまわるクーパーを、そばにあった棒の杭に留めおき、僕はボロアパートの様子を探ることにした。

愛人を囲っているにしては、あまりにもひどい外装の貸しアパート

トだと思った。色あせた赤い屋根に、肌色のひび割れた壁……しかもその肌にはしみやしわやそばかすなんかあまりにも多い。

六つ並んだ錆びた郵便受けの中で名前があるのは、ふたつだけだった。102号室と201号室。でもどちらも父さんの名前ではない。

(まさかとは思いつけど、偽名を使ってる、なんてことはないよなあ)
一階は101号室から103号室までで、どうやら一号室と二号室は、その様子からいって空室のようだった。さて、次は二階だ。

僕は赤錆びた階段をゆっくり音をさせないように上っていき、201号室から203号室までをそっと思渡した。

201号室の窓は開いていて、そこからTVの音と風鈴の音色が洩れているのが聞こえる。202号室は空室。そして最後が203号室だ。

ほんの少しだけ開いている窓から、ジーガシャン、ジーガシャンという音が響いてくる。

(いったい父さんは、ここで何を……?)

僕は姿を見られないように、そっと体を屈めて前進した。このアパートのドアはどれも、蹴破ろうと思えばそうできそうなくらいの薄っぺらなドアで、しかも木製だった。

そして僕がドアに耳をぴったり当てていると、ジーガシャンという音がやんだ。今度はニャオンという甘えるような猫の声が聴こえてくる。

「ははは。もうエサはないぞ。ミルクもこれでおしまいだ。昼寝はよそでやってくれ」

ミシミシという床の軋む音が近づいてくる。

(まずいつ!)

ガラガラつと窓が大きく開け放たれると、父さんはそこから野良猫を二匹、放りだしていた。三毛猫の大きいのと小さいのだ。たぶん母猫とその子供なのだろう。

「……みずほ」

無駄だとわかっていながらも、僕は思わず野球帽で顔を隠していた。でもなんと罰の悪い思いをしている僕のことを、父さんは快くポロアパートの狭い部屋へと迎え入れてくれ、さらに中古の小さな冷蔵庫からメロンのアイスまでくれたのだった。

「ふうん。父さんが浮気ねえ」

まるで人ごとのように、父さんは事務机の前で腕を組んでいる。さきほどのジーガシャンという音は、旧式のワープロの印刷音だったのだ。

「残念ながら父さんにそんな甲斐性はないよ。まあでも、母さんの言うことは一部あたってはいるな。父さんは家族に対して秘密を持っていることに、後ろめたいものを感じていたから　このアパートはオンボロな上に呪われた屋敷の裏手にあるってことで、家賃が格安なんだ」

「格安って、いくらくらい？」

僕は一組の机と椅子の他には、ワープロと冷蔵庫しかない殺風景な室内を見回した。うわ、隅には蜘蛛の巣まで張ってる。

「月五千円だ。ちなみに他のふたりの住人は、生活保護を受けている人たちらしい。まあ父さんのポケットマネーで借りられる部屋なんて、そんなもんさ」

父さんは肩を竦めると、印刷の終わった原稿を重ね、とんとん整えている。

まさか、父さんがミステリー小説の執筆に集中してとり組むためだけに、こんな秘密の隠れ家を借りていようとは。

奥の七畳ほどの部屋は未使用で、押し入れに布団がしまっているわけでもなく、当然、愛人が隠れているような気配もまったくなかった。

「まあ、母さんにはこんな話したら、そんなお金にならないもの、家で書けっことになるんだらうけどな」

「まあ、そうだろうね」

正直なところ、浮気疑惑が消失してしまった今、父さんがここで何をしようかと、僕にはどうでもいいことのような気がした。むしろこの場所を僕と父さんの　そしてクーパールの　秘密の隠れ家として愛用するのも悪くないってそんなふうにさえ思った。

「今月の末にはここを畳むつもりでいるから、母さんには黙っていてくれ。べつにやましいことは何もないんだが、まあそのなんていうか、母さんは疑い深い性格をしてるからな」

「わかってるよ。絶対誰にもなんにも言わない」

投げやりな調子で僕は答え、七畳間の埃っぽい窓をガラリと開けた。もしかしたらと思っただけど、やっぱりそうだ。この窓からは、呪われた屋敷の一室がぼつちり見渡せる。

「ねえ父さん。父さんはここへきてから、この部屋の窓を開けた？」

「ああ、一度だけな。でも向かいの屋敷の様子があんまりはつきり見えるんで、なんとなく悪いような気がして、開けないことにしたんだ」

みしみしと畳の床を軋ませながら、父さんが僕の隣にやってくる。「なんでも、この屋敷に住んでたお嬢さんは、自分の病気が不治の病いであることを悲観して、自殺したんだそうだ。そしてそのことを悲しんだお母さんはやがてノイローゼになり、すっかり気が狂ってしまった。お父さんはそんな奥さんの姿を見ているのがつらくて、娘が首を吊ったこの屋敷をでることにし、娘を思いださせるものもすべて、そのまま置いていったんだって、そう聞いたよ」

「じゃあ、ここから見えるあの二階の部屋が、そのお嬢さんの部屋なのかな」

たぶん、襖がぴったりと閉まっていたとしたら、その部屋の中のものは何も見えなかっただろう。黒い箆笥や桐の調度類、木彫りの熊が魚をくわえている置物や、日本人形。あと何故か昔はやっただつこちゃん人形が床に転がっているのが見える。そして、その部屋を守るように、二匹の大きな陶製の犬がいた。一匹はダルメシアンで、もう一匹はドーベルマンだった。

僕は野球帽をとると、軽く目頭をぬぐった。呪われた屋敷の真実は、あまりにも悲しいものだった。

べつに僕はそのお嬢さんのことを直接知ってるわけじゃないし、泣かなければいけないほどの理由は、どこにもないような気はする。でもその部屋をじつと眺めていると、ある種の寂寥感というか、無念な思いのようなものがじんわり胸に伝わってきて　どうしてか、僕の心を熱くさせた。

父さんは、そんな僕の肩を一度だけ軽く抱くと、また床をみしみし言わせながら隣の部屋へと戻っている。

僕は父さんに、絶対に母さんにも美月にも、このボロアパートのことを何も言わないと、改めて男と男の誓いを立てた。それから心の中で、この部屋の窓から見たことも決して誰にも何も言わないことを自分自身と約束した。

病気でとても苦しんで、最後までとても苦しんで亡くなった人のことを　噂話の種にするようなことだけは、絶対にしたくないと思っ

第6章

ところで、僕がクーパーと組んで名探偵ごっこをしている間、家では大変な出来ごとが起こっていた。いや、僕の目には極めてくだらない、とるに足りないことなのだけれど、当事者たち　美月と松平　にとつては一大事件のようだった。

松平はいつものように僕の家へ遊びにきたのだが、あいにく僕はクーパーと散歩に出かけていて留守だった。当然、僕が父さんの浮気調査をしてるなんて知らない母さんは「すぐ戻ると思うから、二階に上がって待っててちょうだい」なんて言ったわけだ。

僕と美月の部屋の構造は、美月の部屋のほうが戸口側で、真ん中のカーテンを引いた奥のほうが僕の部屋になっている。ゆえに、カーテンを閉じるとそこは密室状態になるわけで　行儀のいい松平はたぶん、僕になんの断りもなくゲーム機のスイッチを入れるのは悪いと思ったのだろう、大人しく漫画を読みながら僕が帰るのを待っていたらしい。

そしてそこへ我が家のお嬢さま、プリンセス美月がやってきた。麗しのプリンセスは馬鹿な兄貴は散歩で留守中だと知っていたので、いつものようにアホくさいファッションショーをやりはじめた。しかし、実に間が悪いことに、彼女がその日着ようと思っていたのは、おニューの水着だった。

隣の部屋からガサゴソいう音がするのを聞きつけた松平は、僕が帰ってきたものと思い、勢いよくシャツとカーテンを開けた。

「きゃああああっ！」

美月はその時上半身裸で、真っ平らな胸を松平に見られたと、まあこついつたわけだ。

「なんだか可哀想だったわ、松平くん。耳まで真っ赤にしてね、僕が悪いんです。ごめんなさい」って言って帰っていったわ」

母さんは食卓テーブルに夕食のおかず　サラダやヒレカツなどの皿を整えながら、溜息を着いた。

美月は我が家の男ふたりの前でデリカシーのない話をされたと感じているのか、死ね、とばかりにグサリとトンカツを突き刺している。

「あんな人、ちつとも可哀想なんかじゃないわ。可哀想なのはこのあたしよ。恥かしくてもうお嫁にいけないわ」

「じゃあ、松平くんにお嫁にもらってもらうか？」

父さんが僕に目配せしつつまぜっかえすと、美月は烈火のごとく怒りを炸裂させた。

「もういい！お父さんもお母さんも、娘が大切な裸を見られたのに、そんなことどうでもいいんでしょ！あたしはあんなえっちなぞき魔となんか、絶対絶対ぜええったい、結婚したりなんかしないんだから！」

（松平のほうだって、ごめんだろうよ）と僕は言いかけたが、これ以上何か言くと妹が泣きだすと思ったので、黙ってトンカツを口に運び続けた　うん、美味しい。

「ほら、みづきもみずほも、もつとたくさん野菜を食べなさい。それとみずほ、ごはん食べ終わったら、松平くんに電話してあげて。べつに気にしないで明日もうちへ遊びにいらっしやいって」

「……あたし、キャンプにいかないから」

美月が押し殺したような声で呟く。

「あんな人とキャンプにいくくらいなら、クーパーと留守番でもしてたほうがまだましよ！」

箸を投げ飛ばさんばかりの勢いで置くと、お膳を下げることもなく、好物のヒレカツも残したままで、美月は二階へ上っていった。

「あんなニンペタンな胸、見せられた松平だって迷惑だよなあ」

「ごはんをかきこむ僕を、母さんがメツ！という目つきで睨む。もちろん美月の前で同じ科白を言うほど、僕は命知らずではない。

「だからさ、べつに気にするなって。そりゃ故意に風呂場の窓をの

ぞいたっていうんならさ、変態と言われようとなんと言われようと言わないかもしれない。でもあれは事故だったんだからさ、気にしないで明日もうちに遊びにこいよ。美月も意識してるみたいだから明日はミカちゃんちにでもいくだろうし……うん。うん……」

せっかく僕が松平を説得しかけてたのに、廊下で話を聞いていた美月が大声で、

「いったい誰が意識してるってのよ！」

と怒鳴ったのが受話器の向こうまで聞こえてしまったらしい。

「あおさ、カイ。悪いんだけど俺、やっぱりキャンプには一緒にいけないよ。もし美月ちゃんの胸を見たなんて平野に知られたら、首しめられて殺されるかもしれないしさ」

「おまえねえ……」

いつもは堂々として男らしい松平が、まるで彼らしくなくオドオドしている。べつに彼は平野の怒りを怖れているというわけではない。ただ美月と顔を合わせて気づまりな思いをするのが嫌なのだ。

「まあとにかく、あんなハンカくさい妹のことは気にするなよ。松平がいかないって言ったらたぶん、井家くんだっていかないって言うだろうし、そしたら結局みんないかないってことになっちゃうだろう。この企画は井家くんが夏休みにどっかいったことないって言うてたから、僕が無理に母さんに頼むことにしたんだからさ。うん……そうだよ。井家くんをがっかりさせないためにも、キャンプにはみんなでないこうよ」

「うん、わかった。よく考えてみたら本当にそうだよな」

いつもの松平らしく、力強い語調に戻ってきたのを聞いて、僕は少しほっとした。やれやれ。あんなまな板みたいにぺったんこな胸のせいで、二時間半も長電話をすることになるうとは。

キャンプ当日は、とても澄々しく晴れ渡っていた。母さんもこの青空と同じくらい、すこぶる上機嫌で　僕から話を聞いた父さんが、のらくらした態度を改めたためだ　最高のキャンプ日和にな

りそんな予感がした。

父さんは運転席に乗り、助手席には美月、後ろに僕と母さん、そのまた後ろに井家くんと平野、松平という席順だった。最初は母さんが助手席に乗る予定だったんだけど、美月が後ろの席は絶対嫌だと言いつ張ったので、このような席順となった。

砂湯までの二時間ばかりの時間、僕はほとんど後ろを向いて、みんなと話しこんでばかりいた。そしてサンドイッチやおにぎりやザンギなんかを食べ、父さんや母さんにはわからない、ゲームや漫画の話をして盛り上がった。

ちなみにクーパーは隣の鳥の巣頭のおっさんに、三食エサを与えてもらえることになっているので、心配はまったくくない。

砂湯という場所は屈斜路湖くつしゃろこという湖のほとりにあり、その名のとおり砂を掘ると熱いお湯が沸きでくる場所だ。八月のこの時期にはいつも、キャンプ場は大いに賑わっていて、湖の岸边には水着姿のカップルや家族づれなんかが大勢いる。

ちなみにここ屈斜路湖ではクツシーという怪物が湖底に眠っているという伝説があるらしいけど、夢もロマンもないことに、松平も平野も井家くんも僕も、そのことを少しも信じていなかった。

「ネス湖のネツシーと兄弟だつてところからして、あやしいよな」「そうだよ。ネス湖には本当にネツシーがいるかもしれないけど、屈斜路湖のはただその噂に便乗したつていうだけなんじゃないかな。ねえ、父さんはどう思う?」

ワゴン車から折りたたみ式のテントやコンロなどを取りだしている父さんに、僕は聞いた。

「うーん……そうだな。ここの湖のあまりにも青い青さをみると、そういう生き物が住んでいてもおかしくないって、父さんはそう思うね。ここの湖に住む神さまが、そういう姿で現れたつていう可能性だつてあるだろうし」

およそ新聞記者らしくない見解ではあるけれど、子供たちはみな父さんの意見がとても気にいったようだった。父さんの指示の元、

陸軍の兵士なみの従順さで、テントを手際よく張っていく。その傍らで母さんや美月は調理器具を整え、早速とばかり、バーベキューの下ごしらえにとりかかっている。

そして五人用の五角形のテントと三人用の三角形のテントを張り終えると、今度は火を起すことになった。大抵の男の子というのは、この火を起こすっていう行為が大好きで、暫くはみんな、コンロを囲んでわいわいやつてたわけなんだけど、美月が包丁で軽く手を切ったのを機に、その騒ぎは突然、雨が降ったみたいに鎮火してしまった。

平野も松平も、お母さんが念のためにと持たせてくれた絆創膏を、リュックの中から急いで探しだしている。といつても、一番早かったのは母さんで、美月の左手の人差し指には、我が家の救急箱の絆創膏が貼られることになったのだけけれど。

でもその様子を見ていて、父さんも母さんも井家くんも、あることに気づいたみたいだった。つまり、平野は以前から美月に好意を持っており、松平のほうはそうでもなかったけど、つい先日のおっぱい事件で急に相手を意識しはじめたらしい、ということに。

それから平野と松平は、水汲みだのなんだの、美月がしなければならぬ仕事に手と口をだし、彼女はモテモテぶりをひけらかすように、ふたりを下僕としてこき使った。

「そうね、水くみは松平くんにいつてもらってもいい？あたしは平野くんと一緒に、お米をとがなくなっちゃ」

つまり、それはこういうことだ。松平はただ水をくんで往復するだけの係。でも平野は美月と一緒に水飲み場まで行って、彼女が米をとぐのにつきあう係。

「あらあら。うちのお姫さまったらモテモテね」

三人が水飲み場のほうへ消えていく後ろ姿を、母さんは微笑みつつ見守っている。

「まあ、今のところ平野くんが優勢みたいだけど、これからどうなるのかな」

助手の井家くんに火かき棒を手渡しながら、父さんは意味ありげな眼差しを母さんと交わしている。

でも僕は、父さんや母さんとは微妙に違う見解を持っていた。確かに平野は、美月のことが好きなのかもしれない。でも松平はべつにそういうわけではないのだ。ただ彼は美月のぺったんこな胸を見てしまったという罪悪感から、彼女のことを手伝っているにすぎない。

正直なところ、僕は車を降りた時点で、妹のことをどついてやりたくて仕方なかった。

松平は車の中でもいつもより少し元気がなく、車窓の景色をぼんやり眺めていることのほうが多かった。そして彼はその間、自分がまずしなければならぬことについて、ずっと考え続けていたはずなのだ。松平はキャンプ場に辿り着いて車を降りるなり、真つすぐ美月に近づいていった。

「美月ちゃん、この間はご……」

でも妹は松平のことを無視し、母さんがバスケットやその他の荷物を降ろすのを手伝いはじめた。

「ねえ平野くん、そこにあるあたしのリュックとって」

平野が後部席の荷物から、美月のキキとララのリュックをとりだす。

「優しいのね、平野くんて。どうもありがとう」

松平と美月の間にあったことを何も知らない平野は、その魔性の笑顔にやられてしまったと、まあこういったわけだ。

夕暮れ時の生ぬるい空気の中、バーベキューを囲っている間も、美月の松平に対する復讐は続いた。妹は父さんや母さん、また平野とばかり話をし、そして彼女が嫌いなタイプのはずである、井家くんにさえ優しくした。

「わたし、井家くんの妹と同じクラスなのよ。朋子ちゃんはちがうグループの子たちと仲良くしてるから、あんまり話をしたことはな

いけど」

「うん。妹も言ってたよ、なんでお兄ちゃんだけキャンプに行くのって。でもそんなにたくさん車に乗れないからって言うておいたんだ」

肉や野菜の串があらかた片付くと、父さんがとうもろこしを焼きはじめた。特製のソースを刷毛でつけ、ひとりひとりに手渡していく。

「肉も美味しかったけど、さっきのいもだんごを焼いたのもうまかったよなあ。このとうもろこしも最高だし」

井家くんが「うまい」とか「おいしい」という言葉をあまりにも連発するので、みんなそのたびに笑った。平野がそのあと井家くんの絵日記について教えてくれたところによると、どうも彼は「今日はカイくんちでおいしいチョコレートケーキを食べた」とか「カイくんちでサンドイッチとレモネードをごちそうになった」とか、そんなことばかり書いていたらしい。

そして美月は井家くんに注目が集まることはまったく気にしなかったが、話が松平のことに及ぶと、突然冷たく態度を硬化させるのだった。

「松平くんはスポーツが得意なんですってね。サッカーとか野球とかドッチボールとか……うちのみずほは勉強はわりとできるほうだと思っけど、スポーツはいまひとつだから、今度教えてやって」

もちろん僕は母さんの意図に気づいていた。松平がひとり、元氣なくしょんぼり食事している様子を見て、気になったのだと思う。「あら、お母さん。平野くんは野球部に入っていて一軍なのよ。すごいでしょ。小学三年生で一軍になれる人なんて、ほとんどいないって言ってもいいくらいなのよ」

「そう。平野くんもすごいよね。結構練習とか大変でしょう?」

「いやあ、べつに。自分が好きでやってるだけだから」

「そっか。野球少年がふたりもいるんなら、バットやボールなんかも持ってくれば良かったな」

みんなの話に僕も時々混ざったりしてたけど、松平は聞かれたこと以外、ほとんど何も話したりしなかった。そしてそんな空気を早く終わらせたいように感じた僕は、テントの中から花火セットをとりだしてやることにした。

「早く後片付けをすませてさ、花火やるよ」

ねずみ花火に線香花火、ロケット花火にドラゴンスターなどなど、ビニールバッグの中には色々な火薬のお楽しみが詰まっている。

食事前は夕焼け色だった空も、今は少しずつ闇の色を強め、どんどん藍色に染まってきていた。僕はビニールシートの上に花火セットの中身をぶちまけると、三人の友達とああでもないこうでもない話し合いをしながら、それをほぼ五分にした。

「お兄ちゃん、その水色のなんかよくわかんないの、ちょうだい」

「駄目だよ、これは。おまえには線香花火を多めにやっただろ」

「じゃあその分返すから、その水色のちょうだい」

「いやだね。大体さつきも井家くんからねずみ花火を二個も横どりにしたろ、おまえは」

美月の口許がへの字に曲がり、涙がうつすらと瞳に浮かんでくる。

「美月ちゃん、俺のをあげるよ。でもそれ、火を点けたらすぐポポポツとなるから、気をつけたほうがいいよ」

「ありがとう、平野くん」美月がぱつと顔を輝かせる。「どっかの誰かさんとちがって、すごく優しいのね」

たぶん松平は被害妄想的に「どっかの誰かさん」が自分のことだと思っただろう、色つきの煙がでる玉をふたつ、美月に手渡していた。

「他にも、好きなのがあったら持って行っていいよ」

内心、やれやれと思いつつも、この時だけは美月も松平に笑顔をを見せていたので、僕は少しだけほっとした。そして井家くんと一緒にぼそぼそ妹の苦労話をしながら、まず最初に線香花火を楽しんだ。松平も、花火をしているうちにいつもの彼に戻り、テントで横になる頃には、わんぱく小僧よろしく飛んだり跳ねたりしていた。

五人用のテントには父さんと母さんと美月が眠り 三人用のテントに僕たち四人が押しこめられる形になっていた。まあ三人用といつても大人の三人用なので、子供が四人眠る分にはちょうどいい大きさではあった。

僕たちは自分たちが秘密基地にいるような気分であくわくしていたので、なかなか寝つくことができずに、漫画やゲームの話、クラスの子の話なんかで盛り上がった。父さんや母さんには明日は早いから早く寝なさい、なんて言われていたけど そんなのは土台無理な話だった。

「なあ、二学期からどうする？あのクソ女子どもに一泡ふかせてやりたいような気もするけど、渡辺がいるからなあ」

「あいつ、なんでもすぐ戸塚先生にチクるんだよ。ヨットスクールは女子に甘いから、出席簿で叩かれるのはいつも男子ばかりだしな」

枕元に頭を寄せながら、僕たちは秘密の相談ごとでもするみたい
に、小声で話し合う。

「大分前の話になるけどさ、そういえば先生、女子には忘れ物したらチューの刑とか言ってたよね。実際に実行したってわけじゃないけど、あんなこと言うから『ロリコンなんじゃない？』って女子に噂されるんだよな」

「いえてる。まあ俺とチューさせるぞ、なんて言ったら、女子の忘れ物は絶対ゼロになると思うけどな」

平野が隣に横たわっている井家くんの背中をばしばしば叩く。

「おまえ、サイコーだよ。自分のことを笑いのネタにするなんて、うさ吉には逆立ちしたってできないだろうな」

うさ吉ってというのは、学級委員の宇佐美正吉くんのことだ。

「そうだよ」と松平も押し殺したような忍び笑いを洩らす。「あいつ、井家のこと表面的にはかばうけど、単に自分はこんなにいい奴だってことをまわりにアピールしたいだけなんだよ」

「うん……」しょんぼりしたように井家くんがうなだれる。「でも

俺、宇佐美くんには感謝してるよ。最初の班分けの時に、仲間に入れてくれたのも宇佐美くんだったし……」

「まったく、お人好しだなあ、井家は」

平野と松平が顔を見合わせていると、不意にテントの中を影がよぎったような気がした。それは本当に一瞬のことだったので、みんなは全然気づいていない。

「僕、ちょっとトイレいってくる」

松平と平野のふたりをまたぎ、僕はそっとテントのチャックを開けた。懐中電灯はわざと点けずに、トイレのある方向へ向かうふりをする。そして木立にそっと紛れたあと、足を忍ばせてテントの後ろ側へとまわった。

(やれやれ。やっぱりな)

僕は両手を腰にあてると、こやつをどうしたものかとしばし思案した。そこでは妹の美月が、黄色いテントの壁に耳をそばだてているところだったからだ。

「このチクリ魔。今度は盗み聞きか？」

小声で囁くと、妹は一瞬びくりとした様子だったが、すぐに「しつ」と人差し指を口許に立てていた。中からは平野と松平の少し大きめの声がしている。

「へえ、そんなことがあったのかあ。なるほどねえ。美月ちゃん、おまえにだけロコツに冷たいもんな。てつきり俺はあまりにも意識しすぎるあまり、かえって翼にだけつらく当たってるのかと思つたよ」

「なに言ってるんだよ。俺はべつに好きとかってわけじゃなくてさ、なんかいまだに怒ってるみたいだから、なんとかしようと思つて……」

「ふうん。で、どうだった？べつたんこな胸を見た感想は？」

「べつに……胸が大きいとか小さいとか、そういう問題じゃないんだよ。たとえばさ、俺がトイレに入ってるってことを知らなくて、

美月ちゃんがドアを開けたとするだろ？そしたらどうなると思う？」

「きゃああーって叫ぶことになるんじゃないかな、女子だったら」と井家くんの小さな声。

「そうだろ？そう思うだろ？つまりそれと同じことなんだ。俺はたぶんケツを見られた恥かしさのあまり、もう二度と甲斐家の敷居はまたげないと思う」

「でもまあ、チンポ見られるよりはケツのほうがまだいいよな。美月ちゃんもお尻を見られるよりは、おっぱいでよかったんじゃないか？」

「そういう問題じゃないよ」

松平が平野の頭を殴ったような、くぐもった音がする……続く三人の笑い声。

そこで美月はすつくと立ち上がり、月の光のように冷たい顔をして、父さんと母さんの眠る隣のテントへと戻っていった。

この時、美月が何をどう思ったのか、男の僕にはよくわからなかったけど、翌日、彼女の松平に対する態度が軟化したことだけは確かだった。そして今度は逆に、美月の平野に対する態度は、薄い氷のように微かに冷たくなっていた。きのうの松平に対してほど口コツではなかったけれど。

「俺、美月ちゃんに何かしたっけ？」

平野は摩周湖でも阿寒湖でも硫黄山でも、とても不思議がってたけど、女心と秋の空ってやつだと、僕は適当に答えておいた。まあ今はまだとても暑い夏だったけどね。

第7章

その後、松平は平野と美月の奪い合いをするということもなく、極自然な形で美月と仲良くなっていた。彼女が小二になり、松平と僕が小四に上がった頃には、ふたりはほとんどつきあっていたと言ってもいい。

松平は僕に会いにきたりゲームをしにきたりするのが半分、そして美月と会ってふたりきりで食事をしたり遊んだりするのが半分といったような感じだった。

この小さなカップルの誕生を父さんと母さんは微笑ましい気持ちで見守っていたようだし、僕はといえば、専属カメラマンの任を解かれてよかったと思っていた。

「そうそう。美月ちゃん、その調子」 カシヤツ。

「こつちに目線を向けて……うん、いい感じ」 カシヤツ。

「今度はこつちのジャケットを着て撮影してみよう」

ピンク色のカーテンの向こうでは、なんともいえないバカップルがしょっちゅう盛り上がっている。

そして松平は小四の時の同好会選択で 部活動とは別の、週に一度二時間ある必須科目 写真同好会を選んでいた。彼が撮影する被写体は大抵美月で、一度など、その発表した写真が掲示板から盗まれたことまであったほどだ。

松平はもともと、野球にサッカー、テニスにバスケット、スポーツ部に入っていないのが不思議なくらいの体育万能少年だったけど、「これ！」というような情熱をどのスポーツにもそれほど持っていないかったらしい。

ところが、美月のバカバカしいファッションショーにつきあっているうちにカメラ少年となり、自分の将来の夢はプロのカメラマンになることだと言うようになった。そしてモデル「MIZUKI」の写真集をいつか出版するのだと 僕は時々、妹の悪い菌が松平

に移ったのではないかと、彼に申し訳ないような気持ちになることさえあった。まあ本人は至って妹の下僕であることに満足を覚えているようなので、とにかく彼の目が一刻も早く覚めてくれることを僕としては願うばかりだった。

何故って松平は妹の彼氏なんかにしておくにはもつたいないくらい、僕にとつていい友達だったからだ。

平野は相変わらずの野球少年で、彼は美月と松平がくつついても、べつにどうということもなく毎日遅くまで野球の練習に打ちこんでいたようだ。

今はおにゃん子クラブの渡辺まりなのファンで、漫画の世界では『タッチ』の浅倉南が理想らしい。そして相変わらずクラスの女子たちを「クソ」呼ばわりする彼の姿勢に変化はない。

井家くんは、小三の二学期以降、僕や平野や松平と行動をとともにして、体育会系ふたり組の勢力に逆らえる人間は、クラスの中にほとんどいなかったといっている。

結果として、井家くんフケツコールは自然と少なくなっていく、実際のところ、彼は徐々にそれほど不潔ではなくなっていた。やがて鼻をほじるくせも直り（僕にもよくわからないけど、彼が言うにはそれは僕のおかげだったらしい）、あとはせいぜいちよつと髪の毛がフケっぽいのと、首のまわりが多少汚いという以外、彼に特別落ち度はないように、僕の目には映っていた。

もちろん、女子の目にそう映っていないことは間違いなく確かだ、いくら宇佐美くんが「やめろよ！井家くんが可哀想じゃないか」とかばう機会がほとんどなくなったとはいえ、女子が彼と机をぴったりくつつけることはなかった。

それでもあることをきつかけとして、机をくつつける・くつつけない以前の問題として、小三の十月半ば以降、彼をクラスのガン細胞扱いする女子の動きは大幅に減った。

それは井家くんが図工の時間に怪我をしたことと、関係がある。井家くんは彫刻刀で版画を削っている最中に、左手の人差し指をすっぱり切ってしまったのだ。

隣の女子の水野が「キヤー！」と金切り声を上げると、クラス中の注目が井家くんに集中した。みんな最初はまたウジ虫でも耳からでたかと思つたが、井家くんの机の上がみるみる赤く染まり、やがて床に血がしたたり落ちるのを見て大騒ぎになった。

戸塚先生はすぐに井家くんを保健室へと連れていき、血の後始末は僕が雑巾でした。

井家くんは保健室では処置が間に合わず、すぐに病院へいくことになり、彼はその日、そのまま教室には戻らなかった。

日赤病院のほうで何針か縫つたということだった。そして左手に包帯を巻いている彼に、女子たちはあまり何も言わないようになった。机を離したり、何かの拍子に井家くんのことを引き合いにだして、馬鹿にしたりするのは相変わらずだったけれど。

とても不思議なことに、僕は井家くんが彫刻刀で指を切つた時のことを、今でもはっきり覚えていくくらいだった。

彼はいったい何が起きたかさっぱりわからないというような表情をしており、まるで他人の指のように自分のそれを眺めるばかりだった。

先生が大慌てで井家くんを連れていく時も、彼はまったく無表情なままで、その時心に受けた印象のことを、その後何年たつても僕は忘れることができなかった。

そして大人になった今は、長い間説明することのできなかったその時の心象を、ほんの少しだけ言葉として訳すことができる。それはつまり、こういうことだった。井家くんはいつも、女子たちに何を言われようと、何も感じていないように無表情だった。それどころかうっすらと微笑みを浮かべていることさえあり、ますます女子たちに不気味がられていた。でも彼はまったく何も感じていなか

ったというわけではなく、誰にも気づかれないうところで静かに血を流していたのだ。目に見えない精神的な血、心の血を。そして血を流すことに慣れていた彼の心は、指から血が流れても特別驚くことはなかったのではないだろうか……考えすぎかもしれないけど、僕はそんな気がしている。

小学三年の一学期にはどうなるだろうと思われた僕の学校生活も、夏休みには仲のいい三人の友達もでき、それ以降特にこれといって大きな問題もなく過ぎていった。

僕に友達をつくる小さなきっかけをくれたクーパーも、とても元気だ。

家の近所にある動物病院の先生の話によると、クーパーはたぶん今人間の年齢に換算すると、六十歳くらいではないかということだった。もうほとんど老犬といって差しつかえない歳ではあるけれど、歯も丈夫だし、体のどこかに異常があるというわけでもないということだった。

隣の鳥の巣頭の親父を初めとして、近所の人も少しずつクーパーのことを可愛がってくれるようになったし、特に僕のクラスメイトの間でクーパーは大人気だった。

最初は怖い顔つきとでかい体にびびりはするものの、一度その手を頭の上のせてさえしまえば、虎の威を借る狐のような気持ちになれるからだ。つまり「俺、こんなにデカイ犬に触れるんだぜ」とちよつとだけいい気分になれるというか。加えてクーパーはとても愛敬があつたし、子供たちがベタベタとしつこく体を撫でまわしても、少しも嫌がるようなそぶりを見せなかった。

そして何故クーパーがみんなの人気者になったのかについては、ひとつの経緯がある。僕はこの頃からすでに漫画を描きはじめていて、四コマ漫画にクーパーを登場させたからだ。

たとえばそれはこんな内容のものだった。

- (1) 僕がクーパーを連れて散歩にいくと、向こうからおじいさんとシベリアンハスキーのムサシがやってくる。
- (2) 通りすがりさま、睨みあう二匹。
- (3) クーパーとシベリアンハスキーのムサシの間に火花が散る。
- (4) そして立ち去り際、二匹の犬が考えていたのは、
(フツ。俺のほうがいい男だぜ)
ということだった……。

今も昔も動物ものは子供たちに実に受けがよく、男子も女子も一日に一度は必ず、

「カイクン。漫画の続き描いた？」

と聞いてきたものだった。そして僕はといえばみんなの期待が嬉しくて、毎日ない知恵をしぼって一生懸命ネタ考えた。今にして思えば、僕はこのころ感じた快感を忘れることができなくて、その後もずっと漫画を描き続けていたのかもしれない、とさえ思う。そしてクーパーが我が家に来てきて一年ほどが過ぎ、彼がいないことなど家族の誰にとっても考えられなくなった頃、その事件は起こった。

事件の発端は、美月の親友のミカちゃんの家で飼っている犬を、うちで預かることになったことだった。ミカちゃんたち家族はこの夏、二週間ほど沖縄へ旅行にいくのだそうだ。できればシーズー犬のマイコちゃんも連れていきたいのだが、何分沖縄は釧路と違って暑い。彼女があまりの暑さに病気になっただけは大変だから預かってほしい、ミカちゃんのお母さんはそう言っていた。当時はまだ今のようにペットホテルというものが巷に普及しておらず、どこかへでかけるとしたら友人か親戚の家などに預けるのが一般的だった。

でもまさか、マイコのことを二週間預かったことが、クーパーを失うことに繋がるだなんて、この時は誰も、まったく予想だにしていなかった。

「おーい。マイコマイコ、コマイコマイコ、こっちへおいで」

マイコは、家のどこにいようと、名前を呼ばれるとすぐにしっぽを振ってやってきた。色は茶と黒と白の三色で、実に絶妙な配色具合というか、マイコは世界で一番可愛いシーズー犬なんじゃないかというくらい、愛らしかった。美月など、クーパーが死んだら今度は絶対に小型の可愛い犬を飼うのだと、この時しよっちゅう言うてばかりいたっけ。

ちなみにクーパーとマイコはふたりともとても仲がよく、お昼寝の時はいつもベランダで二匹一緒だった。

松平は毎日のようにうちへ遊びにきては、美月の他にマイコとクーパーの写真を撮りまくり、その写真は実に絶妙なツーショットであることが多かった。

たしなみのあるレディとはとても思えない格好でマイコが寝っ転がっている写真や　ピンク色のお腹を丸だしにしていたり、白目をむいて海老ぞりになっていたり　あるいはその横でクーパーがまるで母親のように寝そべっている写真など、また二匹がベランダの窓を隔てて、引き裂かれた恋人同士のように映っているという写真もあった。

だからクーパーがマイコに危害を加えるなど絶対にありえない話だったし、散歩へ連れていくのも、いつも二匹一緒だった。散歩のコースは毎日ほぼ同じで、松平の家のそばのセキレイ公園までいき、公園で遊んで帰ってくるというものだった。事件の起きたその日も、僕と美月はクーパーとマイコと一緒に散歩へ連れていき、二匹のアンバランスなコンビを微笑ましい気持ちで見守っていた。

クーパーは当然、歩幅も大きく堂々とした歩きっぷりなのだけれど、その歩みに追いつこうとするマイコの姿がなんともいえず可愛らしい。あの犬独特のトコトコ感というかテケテケ感というか、またしっぽのふりふり感に至るまで、マイコは何もかもすべてが愛らしかった。

そして彼女がまるで「お慕い申しております」というかのよう
に追いかけている犬は、可愛い彼女にまるきり似合わない狂暴そう
な犬で、通りすがりの人々も、時々物珍しげな目で振り返って
いたものだった。

セキレイ公園に辿り着くと、僕はクーパーを小高い山に上らせ
たり、美月はマイコを抱いて、友達に触らせてあげたりした。夕暮
れ前の涼しい公園には、砂場で遊ぶ子供がいたり、ブランコや滑り
台で遊ぶ子供がいたり、ベンチで話しこむ奥さん方がいたり、僕
たちみたいに散歩にきている人なども結構いた。

今の時代は少子化といわれて久しいけれど、僕が子供だった頃
は、隣近所に同じ学校に通っている子が結構たくさんいたものだ
だった。ただそれぞれ学年やクラスがでんでバラバラということも
あり、顔や名前は知っていても必ずしも一緒に遊ぶとは限らない、
といったような感じだったろうか。

その日、僕はクーパーを思いきり走りまわらせ、糞袋にホカ
ホカのうんちを収めたあと、公園のすぐ向かいにある、松平の家へ
いった。特にこれといって何か用事があったというわけではない。
ただ美月が友達の何人かと鉄棒のそばでぺちやくちや喋りこんで
いたため、長くなりそうな予感がしたのだ。そこで僕は公園を
囲っている白い柵のところをクーパーのリードを結びつけ、
松平の家のピンポンを押した。

彼はふたり兄弟で、上にお兄さんがいるのだけれど、このお兄
さんの晶さんは物凄いプラモ狂なのだ。ガンダム、ガンキャノン、
ザクにゲルググ、それにラアの乗っていたエルメスなど、部屋には
そのコレクションが整然と並べられている。それにキン肉マンの消
しゴム、略してキンケシ、もたくさん持っていたし、ウルトラ
マンやウルトラマンにでてる怪獣の人形コレクションも凄かった。
棲星怪獣ジャミラや、三面怪獣ダダ、みんなが知ってるバルタン
星人や友好珍獣ピグモンなど、ここにはとても書き尽くせないほど
だ。その上漫画のコレクションも物凄いので、僕たちの間ではほとん

無条件に尊敬されていたお兄さんだった。

「僕も、あんな小生意気な妹じゃなく、松平んちみたいなお兄さんが欲しかったな」

その科白を僕は、たぶん小三と小四の二年ほどの間に、百回は口にしていたと思う。そしてそのお兄さんがたつた今、シャア少佐の乗っていたジオン軍のモビルスーツ、ジオングのプラモデル（1/144スケール）を制作中だということで、僕は息を弾ませながら松平家の二階へと上っていった。

窓を大きく開け放ったシンナーくさい部屋では、晶さんがパーツを組み合わせているところで、僕は手伝ってもいいと言ってくれたお兄さんの御好意に甘えて、ジオングの足の部分を松平と一緒にセメダインでくっつけていった。

「つばさよりも、みずほくんのほうがプラモの才能あるからなあ。

つばさは性格が雑だけど、みずほくんは繊細だから」

僕は晶さんにそんなふうにはめられるたびに、嬉しくて嬉しくて仕方なかった。そして僕がプラモ作りに熱中し、すっかりクーパーのことも美月のこともマイコのこととも忘れきっていると、窓の外でキャン、と犬の鳴き声があった。

シンナーの酔いから覚めたようにハツとした僕は、急いで窓際へと走った。松平もお兄さんも、一体何が起きたのかというように、公園のほうを眺めやる。

セキレイ公園では、クーパーが、カづくでリードを柵から振りほどいたらしい、ひとりの男の子を追いかけているところだった。彼が小高い山の上へ逃げようと、また急いでそこから降りようと、とにかくクーパーは彼の後ろから離れなかった。そしてとうとう

まわりにいる子供も大人も手だしできないような状況の中、クーパーはガブリとその子の足に容赦なく噛みついた。

こうしてはられないと思った僕は、すぐに松平家の狭くて急な階段を駆けおり、公園に向かった。

「クーパー！」

クーパーが噛みついたのは、ひまわりマンションに住む三浦くんだった。ガルルルル、と喉を鳴らして威嚇するクーパーは、飼い主の僕にさえ噛みつきかねないような、狂暴な血走った眼をしていて僕は草むらに屈みこむと、震える手で青いリードの端をつかんだ。

「クーパー、こっちへくるんだ！」

クーパーはちらと僕のほうを振り返ったけど、それでも喉を鳴らすことをやめず、ミウラ君に飛びかかっていかんばかりに身を低く屈めていた。

もちろんミウラ君も、腰の抜けた姿勢のまま、少しずつ後ずさってはいたけど、もし僕がリードを離したら、三秒もしないうちに襲われていたに違いない。

「ミウラ君、大丈夫か？」

晶さんが手を貸して立ち上がらせても、彼は何も言わなかった。

ただ泣きそうに赤く濁った目で、

「絶対、母さんに言いつけてやる」

そう一言いい残して、ひよこひよこびっこを引きながら、公園を出ていった。

ミウラ君がいなくなると、クーパーも次第に大人しくなっていくけど、その時公園中の人間から向けられた非難の眼差しを、僕は今も忘れることができない。

クーパーはこうして一年かかって積み上げた近所の信頼を一気に失い、一体いつ何をするかわからない狂暴な犬という、二度と消えない烙印を押されることになった。

だが僕は今も、クーパーは正しいことをしたのだと思っている。もしあの場所に悪いことをしたものがいたとしたら、それは僕やミウラくんのほうだっただろう。僕はきちんとクーパーを監視していなかったし、ミウラくんはミウラくんで、美月からマイコをとり上げた揚句、すべり台から落とそうとしたのだから　クーパーが見

ていられなくなったのはまったく無理からぬ話だったのだ。

もちろんミウラくんも、本気ですべり台の上からマイコを落とそうとは、考えていなかっただろう。ただ「ほら見てみる」とすべり台のてっぺんからマイコを落とそうとするふりをしたただけだったのだと思う。そしてそうすることによって、自分と同年代の女の子の気を引きたかっただけなのだ。

だがクーパーは、すべり台を無理矢理すべらされたマイコの恐怖に引きつった顔を見て、ミウラくんを許そうとはしなかった。そしてマイコのあとからすべり台を下りてきた彼のことを、執念深く追いかけてまわして噛みついたのだ。

当然のことながらミウラくんのお母さんは、ミウラくんが土佐犬に噛みつかれたというその一事のみを問題とし、狂暴犬に対する苦情及び慰謝料の請求のために、甲斐家へ乗りこんできた。

「犬つてのは、しょせん畜生なんですよ。どんなに懐いているように見えたとしても、その本性はケモノなんです。可哀想にうちのターくんはふくらはぎにがっぷり噛みつかれて、血を流してうちに帰ってきたんですよ。もちろんすぐに病院へ連れていきました。そしてたらきちんとワクチンを打っているかどうか飼い主に聞いたほうがいいって言われましたね。狂犬病なんかに感染した場合は、死ぬことだってあるんだそうですよ」

母さんとはかくミウラくんのお母さんに平あやまりにあやまり、彼自身の行いも悪かったことなど微塵も口には出さなかった。そして実際の診察料の代金よりも多い金額を包んだ封筒をミウラくんのお母さんに渡し、とにかく腰を低くして居丈高な相手のことを見送った。

階段の上のほうに並んでその話を聞いていた僕と美月は、なんともいえない重苦しい空気に包まれていた。ミウラくんのお母さんは、うちのお母さんが一年前に保健所の人を呼んだことも知っていて

あの時あの犬を処分してもらっていたら、こんなことにはならなかったのに、と特に強調していた。

「これから、どうなると思う?。」

しょんぼりとした様子で、美月が呟く。先ほど泣いた目が、うさぎのようにまだ赤い。

「僕にもわかんないけど……たぶんもう、あの公園へはクーパーを連れていけないと思う。それと散歩は父さんについてもらうしかないかもしれない。僕や美月みたいな子供が、あんなでつかい犬を散歩させてることからして監督不ゆき届きだつて、ミウラくんのお母さん、言つてたもんな。このままいつたらもしかしたらクーパーは、飼い殺しつていうことになるのかもしれない」

「カイゴロシつて?。」

美月は大きな瞳をぱちくりさせて、隣の僕を見上げている。

「つまりさ、好きな時間に散歩へも連れていってもらえず、一生鎖につながれたまま、欲求不満の状態で終わるってこと」

「えーっ。そんなのクーパーに死ねつて言つてるようなもんじゃない」

「だから言つただろ。それが飼い殺しつていう意味なんだよ」

第8章

その後の母さんの決断は早かった。近いうちに保健所の人に事情を話して、引きとつてもらうつもりだと言っただ。「もちろん母さんだつて、こんなことしたくないわ。でも仕方がないのよ。クーパ―だつてろくに散歩へもいけず、まわりの人にはおつかない犬としてしか見てみられないだなんて、そんなの可哀想じゃないの」

もちろん僕や美月は母さんのこの意見に反対した。この一年、母さんだつて随分クーパ―によくしてやったじゃないか。それなのに今になっていけない子として処分するだなんて、そんなのあんまりだと思つた。血も涙もないというより、母さんには本当の意味での愛情なんてないんだとしか思えない。

「母さんはただ単に、ミウラくんのお母さんにネチネチ嫌味を言われるのが嫌なだけなんだろ。あいつが病院に通っているうちは、後ろめたい気持ちで診察料と慰謝料を支払わなきゃならないもんな」
「それに、元はといえばミウラくんが悪いんだから。あれでもしまイコちゃんが怪我でもしたらどうなつたと思つ？ ねえお母さん、どうなつたと思つ？」

エプロンを引っぱつて揺する娘に、母さんは何も言わなかった。疲れたような顔をして溜息を置き、とにかく上へいつて勉強しなさい、としか。

僕も美月も経験上、こういう時の母さんには何を言つても無駄だということをよく知っている。これ以上どんなに文句を言い募つたところで、母さんが強い意志によつてこうと決めたことには、もはや逆らえないのだ。

それで僕も美月も、静かに階段を上つていったけど、もちろん勉強なんかしなかった。こうなつたら頼みの綱は父さんだけだと、祈るような気持ちでその帰宅を待ちわびた。

しかし、父さんは母さんの意見に賛成だった。僕と美月はほとんど泣き叫びながら「お願いだから、クーパーをうちにおいて」と頼んだ。でも父さんはもう一度こういう事件が起きたとしたら、責任をとることはできないと繰り返すばかりだった。

「いいかい。三浦くんは足を噛まれたくらいですんだけど、もしかしたらもつと大きな怪我をしていた可能性だってあるんだ。もちろんみずほも美月もクーパーのことを信じたいだろう。でもクーパーはもともと血の気が多いタイプの犬種なんだ。うちの犬だけは特別優しい気性を持つてるなんて説明しても、こういうことがあったら誰も信じてなんかくれないんだよ」

「……だからって、殺すの？」僕は目頭を拭いながら言った。

「まだ殺されるって決まったわけじゃないよ。保健所の檻の中にいる間に、誰かいい人が現れて、引きとってくれる可能性だってある」

「同じことじゃないか。僕はクーパーを見殺しにすることなんか、死んだってできないよ。あんな不細工な犬、引きとってくれるなんていう奇特な人がいるとはとても思えない。それに一度飼うと決めたからには責任を持って言ったのは父さんじゃないか」

「そうだよ」と美月も珍しく加勢してくれる。「お父さんもお母さんも冷たいよ。そんなにクーパーを邪魔者にするんだったら、お父さんかお母さんがクーパーの首でも絞めて、直接殺したらいいんだわ」

美月がだだだつと駆けだしていくと、マイコがその後を追った。でも階段を上ることができない彼女は、そこで立ちどまり、駆け上っていく美月の姿を下から見送るしかない。

「父さんも母さんも、見損なつたよ」

僕は押し殺したような声で吐き捨てるように言い、マイコの頭を少しだけ撫でてから、二階へ上っていった。

実際、この夜は本当に一生、父さんのことも母さんのことも許すことはないだろうと信じて疑わなかった。こんなのであんまりだと思った。そして夜、ベッドの中で声を押し殺して泣いていると、

ピンク色のカーテンを隔てた向こうからも、すすり泣きの声がした。今、家族の中で唯一の味方は、普段は小憎らしいだけのこの妹ひとりだけなのだと、僕は暗い闇の中で思った。

翌日、クーパーは父さんのワゴン車の後部席に乗せられて、保健所へ送られることになっていた。美月は泣きながら彼のつぶれたような不細工な顔にチュツチュツと繰り返しキスし、そのたるんだ首に腕をまわして抱きしめた。

クーパーはしっぽを振ることもなく、無表情に美月の抱擁を受けとめ、またいつものように彼女の顔をなめまわすこともなかった。まるでただ静かに、自分の運命に従うかのように。

マイコはひたすらベランダの窓からしっぽを振り　これからクーパーがどこへいくのか知らないのだから、無理もない　一体いつになったらベランダへだしてもらえるのかしら？というような顔をしている。

僕は助手席に乗ると、滅多にすることのないムスっとした顔つきで、車がでるのを待った。もしかしたら僕は一生、クーパーみたいにムスっとした顔つきのまま過ごすのかもしれないとさえ、その時は思った。父さんの運転する、僕とクーパーを乗せたワゴン車が、実は保健所へ向かっているのではないと気づくまでは。

「……どこにいくの？」

重苦しい沈黙を破って、僕は隣の父さんに聞いた。

「ずっと山奥さ。小さい子供なんて誰もいないところに、クーパーを逃がしてやるんだ」

「でも……」少しだけ嬉しくなりながらも、僕はすぐ不安になった。「ごはんはどうするの？そんなところでクーパーが長生きできるかは、とても思えないよ」

「クーパーも、もう歳だからな。野性に適応するのは難しいだろう。でも自由になるっていうのはそういうことなんだ。父さんもみずほも、ある日突然山に捨てられたら、途方に暮れるだろう。それでも

実際そうだったら、なんとかして生き抜こうとするだろうな。自分の手で食べられそうなものを見つけたら、木の枝で釣棹を作ったり……そういう意味ではむしろ、犬のクーパーのほうが適応能力があるといっても過言じゃないと、父さんはそう思うんだよ」

「確かにクーパーが保健所へいかなかったのは嬉しい。でも、もつと何か方法はなかったのかな。そもそも母さんが、クーパーを散歩に連れていってくれても良かったと思うんだ。子供の僕や美月が駄目なら母さんが、どうせ一日中家にいるんだし」

「最初の約束、忘れたのか？」

ガタガタの砂利道を走らせながら、父さんが厳しい視線を一瞬送る。

「母さんは、あれでも母さんなりにがんばったんだよ。もちろん母さんだってクーパーがいなくなるのは寂しいさ。一年も飼えば、誰だって自然と情が移るものだしな。でもクーパーを散歩に連れていくっていうことは、母さんにはできないんだよ」

「どうして？クーパーが不細工で、あんまり格好いい犬じゃないから？」

ハツハツと苦しげな息遣いのクーパーのことを、僕は振り返った。彼は車の中ではいつも、興奮したように息が荒くなるのだ。「みずほ、父さんと約束してくれないか。このことで母さんのことを恨まないって」

僕は後部席に手を伸ばして、クーパーの頭を撫でた。最後の瞬間が本当に訪れるまで、僕は諦めるつもりはまったくなかった。父さんだってもしかしたら、説得のしようによっては気を変えてくれるかもしれないではないか。

「うらまないよ。クーパーさえ、うちにおいてくれるんなら」

父さんはハンドルの上に、重苦しい溜息を着いている。

「母さんが小さい頃住んでた家の隣は、ペットショップだったらしい。それで、母さんは犬や猫なんかが大嫌いになった。毎日、学校へでかけようとするたびに、小屋の中の犬や猫なんか、檻の中

でつらそうにしているように見えたからだ。今はどうか知らないけど　これは今から二十年も前の話だからね　昔は結構犬や猫なんかは粗雑に扱われたものだったんだよ。当然なかなか売れなかったり、大きくなりすぎたり、病気になつたりした動物は、ペットシヨップの主人が殺すこともあつたらしい。家の裏にはシェパードやドーベルマン、ダルメシアンなんか、檻に入れて飼われていて

あんまり糞や尿や体臭の匂いが臭いつていうんで、近所から苦情がでることもあつた。みずほはこれがどういふことか、わかるかい？」　頭から野球帽をとると、僕は押し黙つたままでいた。父さんの言いたいことが、もう大体わかつてしまったからだ。

「母さんはそのペットシヨップの隣に住んでいた。夜になると犬が自由を求めてウォーウォーと言つて吠えるんだ。子供心にも、確かに可哀想だと思う。でもお母さんにはどうすることもできなかった。小さな子供だった母さんにできたのはただ、犬や猫といった動物の影をどこかで見かけたら、とにかく逃げて近寄らないことだった。

父さんの言いたいこと、みずほにはわかるかい？」

「なんとなく」と僕は小さな声で言った。

「父さんだつて、べつにクーパーが憎くて捨てようつていうんじゃない。でもこうなつてしまった以上、母さんにはクーパーの存在が重荷なんだ。小さい頃に刷りこまれたものつていうのは、本人にもどうしようもないものなんだよ。犬や猫が嫌いだつていうと、多くの人は心の冷たい人を見るような目でその人のことを見る。でもみずほだつて、クーパー以外の土佐犬に噛まれたりしたら……」

「わかるよ。それはわかるけど。でもクーパーはもう歳なんだよ。あともう何年かしたら死んじゃうかもしれない。それまでなんとか飼うつていふことさえできないの？」

キツ、という音をさせて車が止まる。父さんはエンジンを止めると、サイドブレーキを引いた。運転席から降り、後部席からクーパーのことを外にだす。

父さんと僕は、そこから川原を上流へと上つていき、クーパーの

首輪のリードは僕が引いた。そして一時間ほども川を上った時だつたろうか。僕が疲れてへとへとになりかけていると、クーパーがその時、初めて後ろを振り返った。

「みずほ、放してやりなさい」

僕は父さんに言われるまま、クーパーの首からそつと、青いリードを離した。クーパーはうちの子だから、リードを離したくらいでどこかへいくとは思えなかった。でも彼は父さんにも僕にもなんの挨拶さえすることなく、そのまま川原を駆けだしていった。僕が彼の名前を何度繰り返し叫んでも、ただの一度さえ振り返ることなく、もちろんクーパーが車内ですいていた僕や父さんの会話の意味をわかっていたなんて、僕はそんなふうにいるわけじゃない。

でも、それでもクーパーにはたぶん、わかっていたんじゃないかと、僕はそんな気がしていた。そして僕が母さんのことを許せたのは、結局のところクーパーが自分の自由な意志で駆けだしていったように見えたからなのだと思う。

人間の勝手で犬を山に捨てたことを、僕は決して美談にしたいと考えているわけじゃない。でも、それでも 直接クーパーの死にゆく姿を見たわけではない僕は、あれから十数年以上が過ぎた今も、実は彼がどこかで生きているんじゃないかと、そんな錯覚を覚えることがあった。もちろんそれはあくまでも僕個人の感傷であり、どう考えてもありえない話ではあったけれど。

そして小四の終わり頃、僕は再び札幌へと戻ることになり 父さんの転勤で クラスのみんながしてくれただお別れ会で、僕は泣いた。フルーツバスケットや歌や劇、そして最後にあつた甲斐瑞穂くんに送る言葉。

たぶん松平か平野がその文章を読むのだろうと僕は思っていたけど、教壇に立ってその手紙を読んだのは、井家くんだった。

「みんなも知ってると思うけど、僕は小三の時、みんなから馬鹿にされていた。でもカイくんが友達になつてくれたおかげで、僕は少しずつ馬鹿にされないようになりました。カイくんはべつに、もっ

とお風呂に入ったらとか、耳くそほじったらとか、そんなことは一言も言わなくて、ただ面白い漫画を貸してくれたり、家で美味しいものをごちそうしてくれたりしました。とても嬉しかったです。小三の時の夏休みには、松平くんや平野くんも一緒に、家の人がキャンプへ連れて行ってくれたり……カイクんと過ごした楽しい思い出は他にもいっぱいあります。第一休憩所のそばにある池で、おたまじゃくしをとったことや、山花のほうにクワガタ虫をとりに行ったこと、アゲハ蝶の幼虫を釣りをしている途中で見つけたことや、川でサンショウウオを見つけたりしたこと、それにシラトル湖まで潮干狩りをしに行ったことなどです。僕はゲームが下手だったけど、カイクんはこうしたらいいとかあしたらいいよって隣で教えてくれて、それでファミコンも結構うまくなりました。うちにはファミコンがないので、二週間だけという約束で本体とゲームのカセットを貸してくれたこともあります。でも兄弟の誰かに壊されそうだったので、一週間くらいでカイクんに返しました。僕は、他のみんなよりもたたくさん、カイクんにはよくしてもらったと思います。そんな優しいカイクんだから、きっと札幌の学校へいっても、すぐに友達ができると思います。僕もがんばるので、カイクんもがんばってください」

みんなが拍手してくれる中、僕はクラスを代表した彼から、プレゼントを受けとった。家に帰ってからその包みを開けると、中には男の子向けの文房具セットが入っていた。他に個人的には、平野から野球のボールを、松平からはガンダムのプラモデル、井家くんからは鷲が翼を広げた形の、消しゴムをもらった。

第9章

僕は今この原稿を、その時彼らからもらったものを目の前にしながら、あるいは手にとったりしながら執筆している。今もあのころのことがカラーのついた夢のように思いだせるのは多分　その記憶が、僕の心の中で<永遠>の領域に根ざしているからなのだと思う。

札幌へ戻ってからの僕は、塾をさぼるようなこともほとんどなくなり、灰色の現実世界の中へと埋もれていった。当時の僕にとって、受験のために一生懸命勉強することは普通のことだったし、べつに中高の六年間にひどいいじめを経験したというわけでもない。仲のいい友達はそれなりに何人かいたし、文化祭などでもそれなりに盛り上がったような記憶もある。でも記憶をつまぐってみるに、僕はあれから一度も、松平や平野のようなスポーツマンタイプの少年と友達になったことはなかった。井家くんのようにちょっとユニークな感じのする、面白い子もいなかったと思う。まわりに友達としていたのは僕と同じ、勉強のできるもやしっ子タイプばかりで　僕は彼らとゲームや漫画、アニメの話ばかりしていた。

時々僕は、自分があのまま釧路にいたらどうなっていたかな、と想像しても仕様がな想像をすることがある。もちろん小五に上る時にはクラス替えがあるし、みんなバラバラのクラスになっていた可能性が高いだろう。でもクラスが変わってもそれなりに友情は続き、また中学でクラスが一緒になったり、高校で同じ部に入ったりするようなことが絶対になかったと、果たして言いきれるだろうか？　確かに僕は勉強に集中できる環境を与えられたおかげで、現役で北大の文学部に進学できた。だがそれは僕にとって、実はあまり意味のないことだったのだ　大学在籍中にプロの漫画家としてスカウトされ、夢を叶えることができた今は。ただ僕は漫画家になれなかった時の保険として、一生懸命勉強し、自分の学力で挑戦でき

る範囲内の大学を受験したにすぎない。

そもそも、何故漫画家である僕が、微妙に畑違いの小説なんかを書いているかといえば、漫画家としてスランプに陥っているからだ。プロの漫画家としてデビューして七年、僕はまだ二十七歳だった。でもこの七年で、自分が情熱をもって描きたいと思っていたことはすべて、描き尽くしてしまっていた。そして去年のゴールデンウィーク進行が終わったあたりから徐々に仕事を減らしはじめ、今は連載ものを一本も持っていない状況だった。時々、今もつきあいのある出版社から少年小説やゲーム小説などの挿絵を依頼されたり、ポスターやポストカードなどの依頼を受けたりする程度だ。

「先生、まだ仕事はじめないんすかあ？」

カリカリという音をさせながら、この原稿を夢中になって書いている僕に、後ろからアシスタントの後藤くんの声がかかる。まあ今僕は仕事をしていないから、彼のことは元アシスタントと呼んだほうがいいかもしれない。

「だから何度も言ってるだろ。暫くの間は休筆するって」

「だってもう半年にもなるじゃないですか。『邪道極楽ファンタジーシリーズ』が終わってから。そろそろ仕事はじめないと、マジで干されたらどうするんすか。担当の大宮さんとも大喧嘩したままだし」

「いいんだよ。東大卒だかなんだか知らないけど、前から僕はあいつのことが大嫌いだったんだから」

「けど……」

ブラインドを閉めきったままの部屋に、シャツと眩しい光が差しこんでくる。妹の美月が、仕事部屋のブラインドを上げたためだ。

「お兄ちゃん。お昼ごはんの用意、できたよ」

「おお、サンキュ」

手元のスタンドの明かりを消し、僕は椅子から立ち上がった。元アシの後藤くんも、従順な犬のような顔つきをして、後ろからついてくる。

「しかし、いいっすよねー、カイ先生にはこんな可愛くて料理のできる妹さんがいて。これまで何度修羅場で、彼女の差し入れに助けられたことか……」

うつうつと涙ぐむ振りをしながら、右腕を目頭に持っていく後藤くん。美月はといえば、大袈裟ねえ、と笑うのみだ。

「でもいいよね、お兄ちゃんは。これまで本が売れまくってるから、暫くの間はぼつぼつ仕事する程度ですむもんね。あたしなんか、もし今の仕事やめて失業保険切れたら、次なんてないもの」

美月は今、ピアノ教室で先生をやっている。月の収入は十四、五万円くらいだと言っていただろうか。でも少子化などの影響もあって、生徒の数は徐々に減りつつあるのだという。

「あたしもお兄ちゃんみたいに、これ！っていうようなズバ抜けた才能が欲しかったなあ」

「何いつてるんすか。美月さんには料理の才能があるじゃないですか。この素麺、マジでガカツ！口元からベタフラって感じっすよ」

「ありがと」

後藤くんのいつものオタクネタについていけない美月は、僕にこっそり「ベタフラってなに？」と聞いた。

「ベタフラッシュだよ。仕事場の棚にある『美味しんぼ』でも読めばわかるよ」

漫画にそれほど興味のない美月は、軽く肩を竦めている。彼女にとつて興味があるのは、今流行りのコスメやダイエツト情報、行列のできる美味しいお店といったところだったろうか。それと理想の王子さまとデートすること。

「そういえばさ、美月。おまえ覚えてる？松平のこと」僕は素麺をつゆにつけながら言った。

「松平って……つばさちゃんのこと？」

「そうそう。おまえのファーストキスの相手」

隣でなぬ？という顔をして後藤くんが目をギョロつかせるけど、僕はあえて気にしない。

「このごろ、あいつのことをよく思いだすんだよな。あれから十年たったけど、今どうしてるかと思って」

「きつともう結婚してるんじゃない？お兄ちゃんと同じ歳だから、今二十七でしょ。つばさちゃん、女の子にもてるタイプだもん」

「そうだよなあ」

美月の作った梅のおにぎりに、僕は手を伸ばしながら言った。

「でも美月がさ、もし会ってみたって言うんなら、思いきって電話するか手紙でもだしてみようかと思ってさ」

「やめてよ。わざわざそんなこと……昔のいい思い出をぶち壊しにすることないんじゃない？お兄ちゃん、漫画家になつて本がバカ売れた時、結構嫌な思いもしたじゃない。金貸してくれとか、出版社に口きいてくれとか、その他色々……それに、人の心配するより自分の心配したら？真奈美さん、きつとお兄ちゃんがプロポーズしてくれるの、待ってるよ」

藪から蛇をつつきだした僕は、おにぎりでも喉を詰まらせそうになった。そうなのだ。仕事の問題だけじゃなく、今僕は 七年つきあっている彼女と結婚するかどうかという瀬戸際に立たされているのだった。

「まあ、仕事のメドがついたら考えるさ。マナミだつて、そこらへんの呼吸はわかってるよ。もうつきあつて七年にもなるんだから」

「またそんなこと言つて」と、美月は自分のコップに麦茶をついだ。

「漫画描いてる間は、しめ切りに追われて忙しくて、結婚してる暇もなかったでしょ。下手したらマナミさん、明るい農村青年とお見合いして、電撃結婚しちゃうかもよ」

「おまえこそ、自分の心配しろよな」

妹はこの話になると長いので、僕としては自分の優柔不断ぶりをなじられる前に、話の矛先を転じたかった。

「大体美月は理想が高すぎるんだよ。そんなことじゃ一生結婚できないぞ」

「いやあ、そんなことないっすよねえ」と後藤くんが口を挟む。

「美月さんくらいの美人なら、ズバリよりどりミドリでしょう。ちなみに好みのタイプは俳優でいうと？」

「うーん、そうね。キアヌ・リーブスとか妻夫木聡とか。後藤くんは？」

「へっへっへっ、待ってました、というように、後藤くんが胸のポケットからブロマイドをとりだす。

「今の心の恋人はときメモの詩織ちゃんっす。ちなみにその前はエヴァの綾波レイちゃん、その前はセーラームーンのセーラーマーカーキュリー」

「……ねえ後藤くん。つきあってる彼女、なんにも言わないの？」

「ささやかな疑問を美月が口にしても、

「ずえーんぜん」と後藤くんはあっけらかんとしたものだ。「向こうはもつとすごいっすよ。彼女の今の心の恋人は『黄金のガッシュ！』のパルコ・フォルゴレさまっすからね。ちなみにその前は『幽々白書』の飛影と蔵馬。これは二股っす。やおい本いっぱい買っていましたっけね、そういえば。その前が『スラムダンク』の流川楓で、その前が『聖闘士星矢』の氷河って言ってたかなあ」

「でもいいわよね、お互い共通の趣味があって」

「漫画やアニメのキャラについてよくわからないながらも、美月は少しかだけ羨ましそうに溜息を垂れていた。ちなみに美月は今月で彼氏いない歴満三年を迎えようとしている。

「コミケなんていったら、もう大変っすよ。彼女、二十五歳になっただ今もコスプレクイーン目指してるから」

「……へ、へえ。そうなんだ」

「同じ二十五歳という年齢の美月は、少しかだけ顔の表情を曇らせた。そして「ねえお兄ちゃん、コスプレってなに？」と隣の僕に小声で聞いてくる。

「僕はといえば、ただ肩を竦めるのみだった。

「僕と真奈美が出会ったのも、コミケ（コミックマーケット）だっ

た。行ったことのある人は知ってると思うけど、あのなんともいえない独特の雰囲気のある、同人誌の即売会である。僕は高校の時から同人をはじめ、それは最初漫画研究会の先輩方と一緒に、一冊の雑誌を定期的に発行するというものだった。当時漫研の部員は僕も含めて十四名で、どんなに下手であろうとひとり必ず四ページは漫画を描くことになっていた。

かねてより漫画家になりたいと切望していた僕は、自分の実力を試すことのできる絶好のチャンスだと思い、十六ページくらいの短編漫画を一作書いた。それは『異次元惑星エクシード』というタイトルの漫画で、自分でいうのもなんだけど、高校生にしては悪くない出来映えだったと思う。といっても、その十六ページの作品をどこかの雑誌のマンガオーディションに送ったとしたら、落選していたのはまず間違いなかったと思うけど。

そしてそれからというもの僕は、先輩から漫画の技法を学ぶなどして徐々に研鑽を積み、高校を卒業して大学へ進学する頃には、札幌の同人業界でちょっと有名な人物となっていた。やがて数多くの作品を同人・オリジナル問わず発表し、僕の個人誌は一冊だすごとに完売するようになっていた。さらに同人を通して親しくなった東京の友人が、向こうのマーケットでも販売してくれるようになり、その本の何冊かを読んだ『マガジンボーイ』の編集者の方が僕にプロになるきっかけをくれたというわけだ。

真奈美と僕が出会ったのは、僕がプロになる少し前のことだ。彼女は漫画やアニメになどまるで興味が無いのに、友人にまるめこまれてセーラーマーカーのコスプレをやらされていた。コスプレってというのはようするに、自分の好きな漫画やアニメキャラの服装及び髪型なんかを真似ることだ。

コミケへいくとそういう奇抜な格好をした人たちがたくさんいる。そして自分たちの同人誌のPRをするというわけだ（もちろんただ単に個人的な趣味という人もいる）。

僕はマナミと出会った時、セーラーモーンSにでてくる土萌創一教授のコスプレをしていて　　というか、ただ単に白衣を着ていただけでもいう　　戸惑い気味の彼女を見て、すぐに「初心者さんだな」と思った。

あたりにみなぎる異様なまでのオタクエネルギーについていけない彼女は、とても困ったような表情をしていた。他の友人のセーラー戦士たちは四人とも、あたりの雰囲気に対応しているにも関わらず、彼女だけは「マーキュリー、写真とらせて！」とか「決めポーズをとって！」などと言われても、びくびくおどおどするばかりでようするに、ひとりだけ頭数が足りなかったので、無理矢理やらされたらしい　　見かねた僕は、彼女に助け舟をだすことにした。他のセーラーモーンやジュピターやマーズ、ヴィーナスはみなそれぞれ自分の役を演じるのを楽しんでいる様子だったけど、彼女だけはあまり楽しそうじゃなかったから。

「君、本売るの手伝ってくれないかな？」

とんとん、と肩を叩くと、僕がこの中ではわりとまともそうな部類に入る人間だと思ったのか、彼女はほっとしたように、すぐ後ろをついてきた。その間にも僕の白衣には「オレの好きなスポーツは踏み台昇降運動だ！」とか「それってスポーツなの？」だとか「立位体前屈は好き？」だのとカラーマジックで殴り書きしていく連中が絶えない。

「随分、たくさんの人とお知り合いなんですね」

マナミは、セーラーマーキュリーこと水野亜美の青いカツラをとりながら言った。

「同人生活が結構長いからね。でもこの場所では、そんなこと関係ないかもしれないな。全然知らない奴に馴たくされてびっくりしたかもしれないけど、はつきりいつてみんな、本気で君のことをセーラーマーキュリーだと思って話しかけてるんだよ。つまりいつもはブラウン管を通して見てるアニメキャラが、外にでてきたっていう感じかな」

「なんかよくわかんないけど」と、ためらいがちにマナミは言った。「これからずっと、ここに座っててもいいですか？」

彼女はセーラー服の短い丈を気にするように、太腿の上で引っぱっている。べつにいいよ、となるべく素っ気なく僕は言った。

「セーラーマーカーキュリーが本を売ってくれば、売り上げも伸びそうだしね」

何十人という人間が本を並べて売っている中で、僕は自分の個人誌を二冊と、友人から委託されている本を五冊ほど並べた。あとはオリジナルキャラクターの封筒や便箋やシール、ポストカードなどを並べる。

「まいど」

「どうもありがとうございます」

僕の二冊の本は、午前中だけで五十冊以上は売れた。売り切れる前にと、急いで買いにくる人や、僕の本だけを目当てにしてやってくる人なんかもいるからだ。そして僕はそういう人にサインを求められれば色紙にサインし、「白衣に一言書いてもいいですか？」と求められれば、マジックを手渡した。

そして僕が仲のいい同人仲間とオタクな会話で盛り上がっている間も、マナミは本やポストカードその他を包みに入れ、代金を受けとったり、お釣りを手渡したりしていた。

僕は彼女を見ていてすぐに（この子はこの種のことにあまり興味がないんだな）とわかっていたので、客足が途絶えた時なんかには、漫画やアニメの話をするのは避けることにした。そしてそのかわりに、至極一般的なことを聞いた。たとえば、歳はいくつで札幌のどこに住んでいるのか、なんていうことを。

「デザイナー学校の二年生で、今ハタチです。友達に面白いからマナミもこいつで誘われたんだけど……正直いつてちよつと、ついていけない感じ」

「まあ、わかるよ」と、オタクと真人間のハーフである僕は言った。「君……日向さんだっけ？セーラーマーンなんて見たことないんだ

る？でも一応こういう場所へくる以上は、技の名前と決めポーズくらい覚えてこないとな

「そういうものなの？」

「ほら、これ」と、僕は友人の同人誌をめくって、セーラーマークユリーの決め技を、基礎知識として教えておくことにした。

「シャインアクアイリージュンやマークユリアクアミラージュ。マークユリーが水星っていうのはわかるよね？」

「まあ、一応……クイーンフレディ・マークユリーの親戚じゃないってことくらいは」

僕はその他水野亜美がどんな中学生かといったことまでレクチャーしたが、マナミは一向にそうした話に乗ってこなかった。むしろ彼女にとって興味があったのは、本を包んだり代金を受けとったりというような、実際的なことだった。そして僕はその日、珍しく同人会の打ち上げには参加せず、かわりに一生懸命働いてくれた彼女に、お礼として食事を奢る約束をしたというわけだ。

(あれから七年、か)

その後プロの漫画家となり、真奈美とデートする時間はどんどん切り詰められていった。修羅場のあとの輝ける眩しい太陽 長い間、それが僕にとってのマナミだった。他の女性と知りあう時間もきっかけもなかったし、僕は自分の初めての女性である彼女と、このまま結婚するだろうと思っていた。抱えていた一番大きな連載ものが終わり、手持ち無沙汰な状態になる、半年ほど前までは。

(今は正直、結婚どころじゃないよなあ)

豊平川の河川敷に寝転び、僕はひとり考える。漫画のネームに詰まったりすると、いつもここでこうしたものだ。そうすると不思議なことに、いつの間にかいいアイデアが浮かんでいることが多かった。

真夏の太陽に、青い空。銀の方舟みたいに移りゆく雲、川の涼しげなせせらぎの音……それから草刈り機で刈られたあとの、うっ

りするような緑のいい匂い。それにも関わらず、僕の心は今、果てしなくブルーだ。

しめ切りに追われていた頃は、ただとにかく一週間でいいから漫画のことなど考えず、自由になれる時間が欲しかった。そうしたらあれもしてこれもして……充実感を満喫したら再び原稿という名の戦場に戻ってくるつもりだった。そうだ。僕の最初の予定では、その間にマナミと結婚するつもりだったのだ。でも今は……。

「いっそのこと、リセットでもするかあ」

誰も人がいないのをいいことに、僕は豊平川へ向かってそう叫んだ。

マナミとも別れ、中の島にある仕事場兼住居もたたみ、そのまま何か月か海外へ逃亡するのだ。そうして思う存分放浪生活を満喫すれば、もう一度漫画に対する情熱が戻ってくるような、そんな気がした。

僕だつて伊達に七年漫画でメシを食ってきたわけじゃない。その気になれば、それなりのものを描く自信はある。でもそれはかつてとは違い、あくまでもく仕事>としてつてことだ。そこにかつて漫画家を目指してた頃のような情熱の入る余地がほとんどないということ。それが今僕の抱えている問題だった。いわゆるスランプつてやつだ。

こうして気分転換にでもなればと思い、小説を書いてみてもいるが、やはり僕が描きたいのは漫画だった。

まんがまんがまんが……がまんがまんがまんが……。

目を瞑って河川敷に横になり、僕が口の中でもごもご咳いていると、不意にひやっとした感触が額に触れた。突如として現れた人の気配にぎよっとなり、ほとんど反射的にがばりと身を起こす。

「リセットつて、なんのこと？」

すぐそばにいたのはマナミだった。彼女はジーパンにピンクのTシャツというラフな格好をしていて、最近短くした髪の毛の耳元にプラチナのイヤリングを輝かせていた。

「べつに、なんでもないよ」

マナミからラムネを受けとりつつ、僕はボサボサの頭をかいた。「嘘つき。本当はあたしも別れて、ひとりでぶらっと外国旅行にでもいこうかなあって考えてたんでしょ。みずほの考えそうなことだわ」

ラムネのビー玉を落とした途端、しゅわつと炭酸とともに泡が溢れてきた。おかげで僕はおもらした子供みたいに、股間を濡らすことになった。

「それ、みずほに渡す前に、思いっきり振っておいたの」

「おまえねえ……」

それから僕とマナミは黙ってラムネを飲み、夕暮れ時の涼しい風に吹かれていた。僕たちの心は今たぶん、川のこちら側と向こう岸といっても過言でなくらい、遠く離れていたかもしれない。

「畑のほうは調子どう？」

「田植えのほうは先月終わったわ。田植え機の調子が悪くて、何度も止まっては修理の人に見てもらって 来年は買い替えるかって父さんは言ってたけど、確かあのセリフ、去年も言ってたのよね」
マナミの実家は長沼町で代々続く農家だった。何百ヘクタールという広い田んぼに、幾つもあるたくさんのビニールハウス。そこでは苺を主産品として、他にもトマトや大根やピーマン、人参、玉葱、じゃがいもなど、多くの野菜を栽培して農協に出荷してるらしい。でもその実家に彼女が戻ったのは、つい三か月ほど前のことだった。

「これからもずっと、実家を手伝うの？」

「とりあえず、実家にいる以上は仕方ないでしょ」と、マナミは諦めたような顔で、肩を竦めている。働かざる者食うべからずという家訓が、日向家にはあるためだ。

「あーあ。あたしも妹みたいに、転勤族の男とでも結婚して、ドイツかどっかにいこうかなあ」

マナミは頭の後ろで手を組むと、そのままぱったり後ろの草叢へ

と倒れこんでいる。これと似た科白を、この三か月の間にいつたい何度聞かされたことか。

「だったらさ、仕事やめないで、札幌でひとり暮らし続けてたらよかつただろ？」

「だからそのことは何度も言ったじゃない。今時の子たちとはあたし、基本的に話が合わないのよ」

むくれたようにプイと、マナミは僕に背を向ける。彼女はデザイン学校を卒業したあとはずっと、ススキノにあるブティックでフアション Aの仕事をしていた。

「じゃあさ、仕事がうまくいかないから僕と結婚するわけ？」

「べつに……そういうわけじゃないわよ。でもみずほ、ずつと言つてたじゃない。しめ切りに追われぬ空白時間を作ったら、結婚しようって」

「そうだな。昔はしょつちゆうそう言つてたな」

ぶちぶちと雑草を根元から引き抜くマナミの手に、僕は自分のを重ねると、彼女の体に覆い被さるように横になった。

マナミの髪の毛からは微かに、お陽さまと汗、それからシャンプーの匂いがする。

「……ねえ、みずほはなんであたしと結婚したくないの？」「うん」と僕はぼんやり答える。「べつに、マナミのことは今も好きだよ。

でも僕は今、漫画のネタがまったく思い浮かばない状態なんだ。いや、まったくネタがないっていうわけじゃない。ただ、力が湧いてこないんだ。うまく言えないけど、今僕が漫画を描いてもただ苦しただけなんだよ。昔みたいにくるたのしくないんだ」

「くるたのしい？」と、マナミが僕の手をぎゅっと握り返しながら、くすくす笑う。

「そうなんだ。もう一度くるたのモードに入ることさえできれば、僕は自信を持ってマナミと結婚することができる。でも今のままじゃ駄目なんだよ。仮に今僕がマナミと結婚したとしても、僕には自分の妻と子供を養っていけるような自信はない。だからもう少しだ

け、待っていてほしいんだ」

「わかったわ。でも……」と、マナミが後ろの僕を振り返る。「そうしたらみずほはまた、修羅場の国の住人になるんでしょう？ 式を挙げたりするような暇、今度こそ本当につくってくれるの？」

「絶対につくるよ」と、僕は彼女に堅く約束した。「ただ、あの感覚が戻ってくるのを、僕はずっと待っているんだ。それが戻ってきたさえしたら、実際に仕事をはじめ前に式を挙げよう。それから新婚旅行へ行って帰ってきたら、再び修羅場な世界に戻る。それでいい？」

真奈美はイエスと言っかわりに、僕の唇を激しく覆った。それは本当に何か月ぶりかの、心のこもった情熱的なキスだった。

第10章

僕の父さんの甲斐幸一郎は、今から一年ほど前、五十七歳という若さで亡くなった。原因は一度手術した胃ガンが肺のほうにまで転移したことで、抗ガン剤の治療や民間療法、食事療法など、さまざま治療を試してみたものの、あの太っていた体が最後には五十キロ代にまでなつて亡くなった。

父さんは母さんと僕たちに、多額の生命保険のお金や退職金などを残してくれたが、それ以上の大きなものを失った悲しみで、僕たち家族は打ちのめされた。

母さんは父さんが亡くなったことを「馬鹿なこと」だと繰り返し言った。たとえば、こんなふうには。

「あの人が死んで、わたしが生きているだなんて、こんな馬鹿なことがあるかしら」

「あんなたち、よく聞きなさい。お金なんかいくらあつたつて、そんなことは馬鹿なことなのよ。父さんがもういないのに、こんなお金、いったい何に使えつていうの？」

「ああもう、本当に馬鹿みたいだわ。あの人、一体なんのためにこれまで、年金なんてかけていたのかしら？すべては老後のためじゃない。ふたりで旅行したり、美味しいもの食べたり……母さんひとり外国にいつて、いったい何が楽しいのよ？」

僕が大学をやめてプロの漫画家になると言った時、母さんは発狂寸前だったが、父さんは何故かまったく反対しなかった。

「べつに、プロの漫画家になつてやっていけなくなったとしても、それで人生が終わるわけじゃないだろ？母さんは心配しすぎなんだよ。みずほは中学と高校の六年間、どう見ても勉強のしすぎだった。それがもう嫌になつたから、今度は自分の好きなことをしたいつて言うんだ。やらせてやればいいじゃないか」

母さんはそれでも「あとたつたの二年じゃないの」とぶちぶち文

句を言い続けたが、実際に僕が大学をやめて漫画家になってしまうと、それからは何も言わなくなった。ただ一言、

「みずほの漫画読んだけど、母さんにはさっぱりわからなかったわ」と言う以外は。

今時の親の常というもので、母さんは僕が小学生の時から高校を卒業するまで、そして今に至るまでも、僕の好む閉鎖的なカルチャーといったものにまったく関心を示したことがなかった。つまり、僕がゲームの『ファイナルファンタジー』や『ファイアーエムブレム』といったプレイステーション用ソフトを好きなことは知っていても、そのゲームが実際にどういった内容のゲームかについてはまったく知らない、といった具合に。

べつに僕は母さんに僕の描く漫画の内容について理解して欲しいとはあまり思わないけど、というか、むしろわかってもらうことを絶望的に諦めてるといつてもいいくらいだけど、自分に理解できないものを親戚や知人や友人に買ってくれと言ってまわるのはどうかと思う。まあそれが親心っていうものなのかもしれないけど。

母さんは父さんを亡くしてからというもの、めっきり老けこんでいた。これでもし美月がお嫁さんになって家をでていったとしたらきつと空の巣症候群にでもなつて、どうかしてしまっくんじやないかというくらい。

まあ今のところ、美月が結婚する予定はないけど、心配性の彼女は美月が嫁へいっていなくなったあとひとりですしょうかと、今からかなり心配しているみたいだった。僕にさえ、

「みずほ、父さんの遺産分けてあげるから、何か商売でもはじめてみない？」

と本気で持ちかけるくらいなのだ。あの堅実な母さんがだ。つまりそうまでして長男の僕のことをなんとかして繋ぎ留めておきたいというわけだ。

実際のところ、父さんを亡くしたばかりの時の母さんは、というか、この状態は今もまだ続いていたりするんだけど、オレオレ

詐欺とかその手の類のものに、コロリと騙されてしまいそんな雰囲気だった。

「オレオレ、オレだよ。わかるだろ？」

なんて父さんに似た声の人から電話がかかってきたら、

「本当にあなたなの？ええ、わかったわ。だってあなたの遺産ですもの……」

とか、そんな感じで、指定された銀行口座にお金を振りこんでしまいそうな雰囲気、というか。もっとも本人は

「いくらなんでも、あたしだってそんなに馬鹿じゃないわよ」

と言って否定してはいるけど。

確かに母さんは僕の小さな頃から手に負えないガミガミ屋ではあったけど、あるふたつの点で僕は、自分の母親のことを大きく評価していた。

まずひとつ目は、道徳的に高い水準を持つ女性だということ（母親としても、女としても）。そしてふたつ目は父さん以外の男に見向きもしなかったという点だ。

もちろん、妹の美月とTVを見ていて、キムタクのことをカッコいいと言ったり、自分の好きな韓国人俳優のことをサマづけで呼んだりはする。でもそういうことではなくて、母さんは結婚してからはとにかく、父さん一筋だった。うまくいえないけど、そういうことって子供にはよくわかるものなのだ。べつにうちの父さんと母さんはアメリカのホームドラマよろしく、仲良く手をつないだりとかキスしたりとか、そんなことを子供の前でしたことはなかったけど、ふたりは夫婦として、基本的な位置でいつも一致していた。

そしてそういうふうにあることが至極自然で当たり前のことなのだ。と僕たちふたりの子供に思わせたこと。それはやはり凄いことだったのだと僕は思う。子供の頃はそれがあまりにも当たり前すぎて、どこの夫婦も自分たちの親みたいになんか感じなのだろうとしか、思っただけじゃなかったけど。

そして美月は、そんな父さんと母さんの姿を見て成長し、最後の

最後まで父さんから娘として深く愛されたため、結婚相手の理想が高かった。加えて、彼女は三年前に経験した失恋からもいまだに立ち直っておらず、世界のどこかにいるはずの、バカじゃない男と結婚したいと、口癖のようによく呟いている。

美月は母さんから道徳観念の高さ　つまり、貞淑な妻としてのそれを　遺伝的に受け継いでいるようなところがあり、実はそれが結婚を阻んでいる一番の理由ではないかと僕は見ている。

確かに美月は兄貴の僕から見ても美人だし可愛いし料理もうまいしという妹ではあったけど、昔のおませでおきゃんな性格が、どこかへ消えてしまったみたいなのだ。

妹はその後の人生の中で、対人関係などでつまずき、かなりのところ保守的で堅実な人間になってしまった。つまり、自分がそれで絶対に幸せになれるという保証を見たら結婚するタイプというのだろうか。そして大抵の良識ある人々は、こう思うことだろう　「そういう女性はどんなに美人でも、魅力がない」と。

もし彼女が昔のおませでおきゃんな頃の自分をとり戻したら（あるいは思いだしたとしたら）、男なぞ長蛇の列をなして美月にひざまずくだろうと僕は思っている。

美月に松平ことつばさちゃんのことを聞いたのは、つまりはそういう理由だった。松平が結婚していても彼女持ちでも構わない

また今現在独身でフリーだという可能性だってある　彼に、美月が昔はどんな女の子だったかということ、思いださせてほしいと思ったのだ。

しかし、実際に電話の受話器をとる段になると、僕の手はアル中患者のように微かに震えた。もちろん電話をすくぐに、彼がでると思っていたわけではない。少なくとも実家に両親がいることだけは間違いなかったのだ（彼の家は釧路で製材所をやっているから、そこがつぶれていない限りは）、息子さんが今どこに住んでるかということ聞きだそうと思っただけだった。

でも一時間以上も電話台の前をいつたりきたりした揚句　僕はやはり、思い出は思い出としてそのまま美しいものとしてとっておきたいような気がした。妹の美月が言っていたとおり、僕がプロの漫画家として売れはじめた頃、結構嫌な思いもしたのだ。しかも裏切った人間の多くは何故こいつが、と安心感を持っていた奴や、こいつにだけは、と信頼感を寄せていた奴ばかりだった。インターネットにひどい書きこみをしたのが高校時代の親友だったことが判明したこともある。

そのことを考えると僕は　やはり最後のいい思い出を自分の手で壊したくないような、そんな気持ちになったのだ。

スランプを脱したら、必ず結婚しようという約束を僕が真奈美とした日の夜　僕はこんな夢を見た。

燕尾服をびしっと着こなした僕が、ウェディングドレス姿のマナミと、向かいあつて食事をしているという夢だ。

その家は何故か僕が小三と小四の二年間住んでいた、釧路のあの家で　僕はこの家の夢を、あれからよく見ていた　僕とマナミはダイニングキッチンテーブルで、お互い眼差しを交わすことなく、じつと下を向いて食事をしている。

食事のメニューはコーンポタージュスープとコッペパン。結婚式にしては、ずい分質素な食事だ。でも僕がパンを裂き、スープにそれを浸して口許に持っていくと　そのパンは果たして、この世のものだろうかというくらい美味しかった。

ガカツ！ベタフラどころの話ではなく、美食家の海原雄山もよもやこんなに美味しいものを食べたことはあるまいというくらいのも、至上の味だった。しばらくの間、僕はマナミのことも忘れて食事に没頭したけど　不意に、とんとん、と腕のあたりを叩く者があつた。

そこで僕とマナミは同時に顔を上げ、初めて目と目を合わせた。もう一度、とんとんと何者かが腕のあたりをつつく。マナミが白

い長手袋をはめた手で指差した先には　クーパーがいた。

彼は夢の中でも相変わらず不細工な、愛敬のある顔をしていて、僕が手に持っているパンをじっと見つめていた。

久しぶりに再会したというのに、彼には元飼い主の僕より、食べ物のほうが大切なのだ。

僕は籠の中から長方形のコツペパンを手にとると、それを裂いて、彼の口許へ持っていった。そして夢はそこで覚めた。

目が覚めた時、僕は不思議な気持ちで満たされていた。昔はこんな感覚を味わうのが当たり前だったこともあるような気がするけど、なんだかよく思いだせないような、そんな不思議な感覚だ。

そして何故こんな夢を見たのだろうかと分析していく過程ではこんなふう思った。クーパーは、僕たちにとつてかつて、家族も同然の存在だった。つまり真奈美が僕と結婚したとしたら、彼女は甲斐家の新しい家族となるわけで……クーパーは、マナミを新しい家族の一員として認めてもいいと、天国からメッセージを送ってきたのではないだろうか？

そしてまるでそのことを証拠立てるように、かつての情熱が僕の身内にふつつつと煮えたぎってきた。

（　そうだ！僕がずっと待っていたのはこの感覚なんだ！）

僕はベッドから起き上がると、いつものようにブラインドを上げず、薄暗い仕事部屋の机へと向かった。僕はスケッチブックを開くとそこに、次から次へとクーパーの絵を描いていた。正面、後ろ姿、右斜め横、あるいは左斜め横から見た姿などを……。

僕はその日一日中、仄暗い室内のライトスタンドの下で、とり憑かれたように土佐犬の絵ばかりを何十枚となく描いていった。

次の日には、漫画のネームづくりだ。早く描きたくてうずうずする。漫画のタイトルは『名犬クーパー』。不細工な土佐犬がドジで頭の悪い主人公を助けて、次々と難事件を解決していくという探偵ものだ。

僕はそれから二週間ほどで第一話を描き上げ　細かい仕上げはアシスタントの後藤くんにやってもらう　第二話、第三話へととりかかった。僕の心の中で突如として、創作の惑星直列が起こったのだ。

僕はトイレへいったり食事をしたり風呂へ入ったりするのも煩わしいと感じながら、睡眠時間を削つてとにかくペンを握り続けた。どうしてかわからないけど、描けば描くほどネタが浮かんでくる。こんなことは長い漫画家生活の中でも初めてのことだった。

そして『名犬クーパー』の第一話が『マガジンボーイ』に掲載される頃　僕は真奈美と結婚していた。式はまだ挙げてはいないけど、籍だけ入れて一緒に暮らしはじめることにしたのだ。もちろん仕事と新居は別で、新居のほうは中の島ではなく平岸にある。さらに嬉しいことに、名犬クーパーを読んだ平野と松平から、ともに電話がかかってきた。彼らは母さんから僕の仕事場の電話番号を聞き、そこにダイヤルしてくれたのだ。

「前からさあ、甲斐瑞穂っていう名前を見て、もしかしたらとは思ってたんだよ。でも小学生の頃の作風とは全然ちがうし、絵に面影もないから　まあよく考えてみたら当たり前なんだけど　偶然の一致だとばかり思ってたんだよな。平野？あいつからも電話かかってきたのか。うん、あいつは今釧路の末広のほうで居酒屋やってみたいだ。俺も高校卒業してから、かれこれ五年は会ってないな。札幌にいるってどうして知らせなかった？だってそれは……いや、細かいことは会って話そう。え？彼女はいるかって？いないよ、そんなの。なんでそんなこと聞くんだよ。ああ、それじゃ来週ススキノの『サヴォイ』で会おう。じゃあな」

松平がまだ結婚もしておらず、彼女もいないと聞いた僕は、心の中でガッツポーズを決めた。彼は電話の中で、美月の話になると逸らしたがったけど　なんのことはない。昔とちがって太ったから、できれば彼女には会いたくないというのだ。

本当は今日にでも彼に会いにいきたくて仕方ないくらいだったけ

ど、何しろ入稿日は明日だ。でもこの修羅場をアシスタント三人とともに切り抜けてさえしてしまえば、懐かしい友との再会が待っている。

僕は松平がどんなにしぶろうとも、一度は必ず美月と会わせるつもりだった。彼女はいまや、ヴィジュアルで人を判断しない、心の痛みというもののわかるレディに成長したから心配いらぬ、と。そして美月には、父さんが遺言でも言っていたとおり、男はハートで選べと言ってやるつもりだ。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2247f/>

あなごころはクーパーがいた

2010年10月8日15時55分発行